

文部科学省
地（知）の拠点整備事業
（大学COC事業）

—看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた
地域のまちづくり事業—
最終報告書

大分県立看護科学大学

平成30年3月

目次

| | |
|---------------------------------|----|
| 緒言 | 2 |
| 1. 要旨 | 3 |
| 2. 事業の背景 | 5 |
| 2. 1. 大学の沿革 | 5 |
| 2. 2. 事業を展開した地域の背景 | 6 |
| 3. 事業の計画 | 10 |
| 3. 1. 構想と目的・目標 | 10 |
| 3. 2. 推進体制 | 11 |
| 4. 事業の展開 | 17 |
| 4. 1. 準備段階(平成 25～26 年度) | 17 |
| 4. 2. 本格実施段階(平成 27～29 年度) | 29 |
| 5. 事業の評価 | 45 |
| 5. 1. プロセス評価:ステークホルダーの参画 | 45 |
| 5. 2. アウトプット評価:参加者数と訪問回数 | 47 |
| 5. 3. アウトカム評価 | 49 |
| 1) 学生の学修 | 49 |
| 2) 協力者への効果 | 53 |
| 3) 社会への還元 | 61 |
| 5. 4. 外部評価 | 64 |
| 6. 対外発信 | 67 |
| 6. 1. シンポジウム | 67 |
| 6. 2. 学会発表等 | 71 |
| 6. 3. 誌上発表 | 72 |
| 6. 4. 報道 | 73 |
| 7. 予算執行 | 76 |
| 8. まとめと展望 | 77 |
| 資料: | 78 |

大分県立看護科学大学 地(知)の拠点整備事業(大学 COC 事業)推進会議設置綱

推進会議メンバー

大分県立看護科学大学 地(知)の拠点整備事業(大学 COC 事業)推進会議幹事会運営要領

幹事会メンバー

地域連絡会議メンバー

緒言

「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業」

一つの区切りを迎えて

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（COC 事業）に本学が提案した「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業」は、平成 25 年 8 月、COC 事業として採択されました。看護学生が、「予防的家庭訪問実習」を大分市内の本学の地元 2 地区で実施し、それを通してまちづくりをするという事業です。具体的には、本学看護学部在籍する看護学生全員が、1～4 年生からなるチーム（学年を越えた縦割りチーム）を組み、大学周辺の在宅高齢者（協力者）を定期的に訪問し、その生活を理解しつつ予防活動を行うこととしました。

そもそも COC 採択の要件は、「カリキュラムを地域志向のものに改定し、事業終了後も継続する」ことでした。そこで本学では、採択後 2 年間の準備・試行期間を経て、学部のカリキュラムを改定し、本実習必修科目として位置づけ、平成 27 年 4 月から本格的に実習を開始しました。この間には、地域の各方面のステークホルダーに呼びかけて協力を得ながら実習の組み立てを検討し、地元自治会や地域包括支援センター、大分市、大分県等々の関係者からなる「事業推進会議」を立ち上げ、事業を円滑に実施するためのご意見をいただきました。本実習は幸いにして、地域の方々から暖かく迎えられて円滑に実施することができ、当初の期待を超えた成果が得られたと考えています。つまり、少子高齢社会で求められる地域包括ケアの基本となることについて、看護学生が地域から学ぶ機会が実現したということです。これを受けて本実習は、COC 予算の終了（平成 30 年 3 月）にかかわらず平成 30 年度以降も、大学の事業として継続する予定です。ご協力いただいた関係者の方々に、厚く御礼を申し上げます。

本事業ではこれまでも、年度毎に広報用の報告書を作成してきましたが、本報告書では、COC 事業として本事業を実施した平成 25～29 年度までの経過を、準備期、実習内容、評価と成果、今後の課題・展望などの面から、詳しく報告します。本事業が公立の看護系単科大学という特長を活かした取り組みであること、地域から見守られ助けられて学生と大学が育つこと、そして、大学が地域で果そうとしている役割の一端を、紙面から読み取っていただければ幸いです。

平成 30 年 3 月

大分県立看護科学大学
学長 村嶋 幸代

1. 要旨

大分県立看護科学大学（以下、本学）の、看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業（以下、本事業）は、平成 25～29 年度の文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（COC 事業）として採択された。本事業の背景には、①本学が公立大学として地域貢献の使命を負うこと、②本学が看護系の単科大学であること、および、③高齢化の進行が著しい地域に本学が立地していることがある。少子高齢化がますます進む日本社会で保健医療福祉が病院看護から地域包括ケアへとシフトを迫られる中、看護学部の学生が地域に住む高齢者の健康と生活についての新しい実習を通し、高齢者の生活や地域のまちづくりにも貢献することを指向して、予防的家庭訪問実習（以下、本実習）が構想された。

本実習では、看護学部の 1～4 年次生 1 名ずつでチームを組んで、大学周辺地域に住む 75 才以上の高齢者（協力者）1 名ずつを定期的に訪問した。高齢者から続けて協力が得られれば、学生は 4 年間通して継続的に訪問することとなる。このアウトリーチを通して、高齢者の健康の課題を早期に把握し、できるだけ続けて自宅で自立して暮らせるよう、機能低下予防を図る。早期対策が必要な事例については、当該高齢者の了解を得て然るべき機関につなぎ、解決を図る。見出された課題のうち地域で共有して解決すべきものは、これを学生が集約し、公民館等での健康相談や保健指導等に結びつけたり、行政や地域の自治会等と大学が定期的に話し合う中で課題を共有し、方向性を考えたりする。

平成 25～26 年度は本実習の準備期間として、学内のプロジェクト会議と看護研究交流センターが中心となり、事業展開地域の自治会や行政等のステークホルダーと協働する体制を構築した。この体制の下、一部学生による試行的訪問を重ねて実習方法を確立し、また協力者のリクルートを進めた。平成 27 年度からは学部カリキュラムを改定して本実習を全学年の必修科目と位置づけ、学部生全員で編成した 80 チームに全教員を担当教員として割り当て、本実習の本格実施を始めた。実習の進行につれて明らかになった運営上の課題や、外部専門家によるコンサルテーションを通して浮かんだ課題については、看護研究交流センターを中心に対応し、運営方法を随時修正した。並行して事業報告会（地域交流会）を開催し、学生が実習での学びを報告し、健康教室も行った。1 年間に、320 名以上の学生が 80 人の協力者を延べ 400～500 回訪問し、協力者の生活について聴いたり、保健指導を考えたりする実習を行った。ただし、年間 15 人前後の協力者が、主に本人や家族の健康上の理由により、継続しての協力を辞退した。

学生の実習記録等の分析からは、学生が地域に目を向けるようになったこと、高齢者を一生活者としてとらえつつあること、生活環境や地域社会にも目を向

けていること、自分たちの視野が訪問を重ねる中で広がったと自覚していること、および学年を超えた交流によるプラスの効果などがうかがえた。協力者は学生の訪問を楽しみにしており、生活に張りが出たことを報告していた。協力者の生活機能の維持について言えば比較対照群との差は明確でなかったが、学生の訪問により健康への関心の高まりは見られた。学生の報告、年度末に教職員が協力者を訪問した際の聴き取り、地域交流会での所見などを通して、地域で高齢者が自立した生活を維持するための地域的課題がいくつか浮かび上がった。これらを行政や健康推進委員と共有し、一部は具体的な対策につながった。

以上の取り組みは、日本学術振興会による中間評価でS評価を受けた。文科省のCOC事業としては平成29年度が最終年度だが、その状況を見ても初期の目標は相当程度達成したと評価できる。文科省予算の終了にかかわらず、看護学部教育において有意義な実習であるため、平成30年度以降も必修科目として、看護研究交流センターやプロジェクト会議のあり方を一部再編しつつ継続する予定である。

2. 事業の背景

2. 1. 大学の沿革

大分県では「心のかよう福祉の充実と健康づくり」を県政の最重要施策とする中で、それを支える人材の確保と資質の向上が緊急課題となっていた。そこで平成6年に県立看護大学設置準備室が設置され、設置場所には大分市富士見が丘団地に接する大分郡野津原町（当時）廻栖野が選ばれた。平成9年12月19日、文部省（当時）により設置が認可された。こうして大分県立看護科学大学は、平成10年に、その建学の精神（表1）と教育理念（表2）の下、看護学部看護学科のみから成る単科大学（1学年の定員80名）として開学した。

その教育体制の特徴は、4つの大講座の下に科目群（一般的な“研究室”に相当）を配置している点と、大講座の一つとして人間科学講座7科目群を設置し“非看護系の教員”を多く擁している点である。その狙いは、看護の対象を「ヒト・人・人間」つまり生物学的存在・個としての存在・社会的存在として総合的に理解し、看護の基盤となる科学的根拠とその応用能力を養うことである。

また、平成14年には大学院看護学研究科の看護学専攻博士（前期）課程（修士課程）を、平成16年には博士（後期）課程を開設した。その後は大学院に多様なコースが増設され、現在では博士（前期）課程（修士課程）に看護学専攻の5コース（広域看護学コース、助産学コース、NPコース、看護管理・リカレントコース、研究者養成コース）と健康科学専攻を設置し（定員32名）、博士（後期）課程に看護学専攻と健康科学専攻を設置している（定員4名）。すなわち、保健師・助産師は大学院で養成し、看護学部は看護師養成に特化している点が、本学の特色となっている。

さらに、平成16年には地域と大学をつなぐ窓口として、看護研究交流センターを設置した。その活動は、時期により変遷を経てきた。平成20年9月から平成25年3月までは、西日本で初めて訪問看護認定看護師教育課程を開設した（現在休止中）。前期の大学院NPコース——診療看護師（Nurse Practitioner, NP）を養成するコース——は平成20年に開設されたが、その運営の一部は看護研究交流センターが担ってきた。そして平成25年度以降は、後述のようにCO-C事業に関する業務も同センターが担うこととなった。同センターは平成28年度以降、6チーム（NP事業推進チーム、継続教育推進チーム、国際交流・留学生チーム、学術ジャーナルチーム、産学官連携推進チーム、地域交流チーム）で構成している。

一方、開学の翌年には、健康増進に関する研究とその知見に基づく地域貢献を行うため、「野津原プロジェクト」を開始した（開学当時、本学は大分郡野津原町に立地）。これは平成18年に、健康増進プロジェクトと改称された。同プロジ

ェクトでは主として、高齢者の健康増進を目指した介護予防事業プログラムの開発と、大分県内での健康開発活動の普及を中心に、さまざまな活動を展開してきた。その一環として、介護予防事業を支えるボランティアの育成や、高齢者のサロン等で行われる介護予防事業の支援も行ってきた。

もう一つ、本学に特徴的なシステムとして、コンタクトグループがある。これは、1年生から4年生まで数名ずつで構成する学年縦割りのチームで、各チームに2名ずつの担当教員が割り当てられる。毎年春には、コンタクトグループ対抗のスポーツ大会が恒例となっている。これ以外の活動は各グループの自主性に任されており、グループによってはハイキングなどに行くこともある。

表1 建学の精神

-
- (1) 看護学の考究
 - (2) 心豊かな人材の育成
 - (3) 地域社会への貢献
-

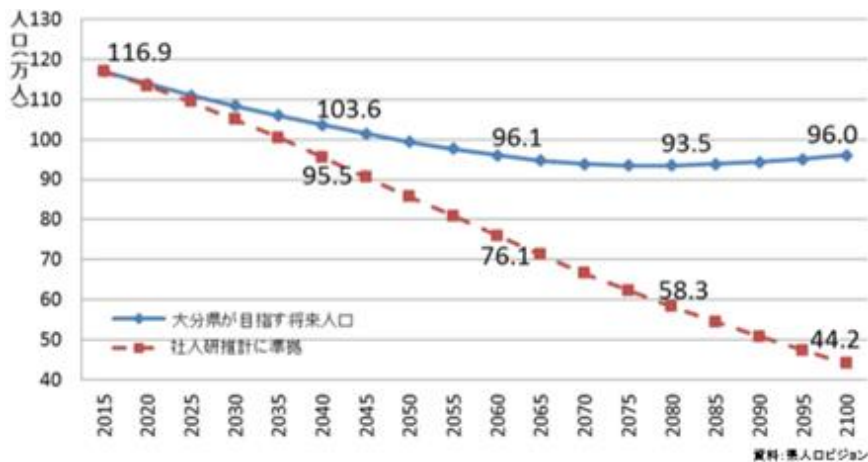
表2 教育理念

社会で生活する人々に対する理解を深め、看護に関する専門知識・技術の修得とともに、豊かな人間性と幅広い視野や、科学的根拠に基づく問題解決能力など看護実践に関する総合的能力を養うことにより、地域社会における健康と福祉の向上に貢献し、看護の社会的使命を十分担うことのできる人材を育成します。さらに看護学の進展に寄与できる人材を育成します。

2. 2. 事業を展開した地域の背景

大分県は九州の北東部に位置し、平成の大合併を経て現在は18市町村から構成される。総人口は約115.7万人（H29.2.1現在）で、その4割は県庁所在地である大分市の人口である。本学は大分郡野津原町廻栖野に開学したが、現在は合併により大分市の一部となっている。

県人口は昭和30年の127.7万人をピークに減少を続け、昭和の末には一時的に増勢に転じたものの、昭和60年以降また減少傾向が続いている（図1）。全国的な少子化・高齢化は大分県でいっそう顕著に進行している。平成24年の高齢化率は27.6%（大分市では21.6%）であったが、平成28年10月には31.2%（25.5%）となった。中山間地区などでは、空き地や空き家問題など、地域住民の生活の安全に関わる問題が生じており、対策が急務である。



| 区 分 | 面 積 H27.10.1 (km ²) | 世帯数 H29.2.1 (世帯) | 人口 H29.2.1 (人) | | |
|-------|------------------------------------|---------------------|----------------|---------|---------|
| | | | 総 数 | 男 | 女 |
| 大分県 | 6,340.70 | 488,919 | 1,157,422 | 548,056 | 609,366 |
| 大分市 | 502.39 | 206,184 | 478,809 | 230,170 | 248,639 |
| 別府市 | 125.34 | 55,169 | 120,800 | 54,876 | 65,924 |
| 中津市 | 491.53 | 36,136 | 83,581 | 40,201 | 43,380 |
| 日田市 | 666.03 | 25,320 | 65,550 | 31,013 | 34,537 |
| 佐伯市 | 903.11 | 29,421 | 70,784 | 32,615 | 38,169 |
| 臼杵市 | 291.20 | 15,085 | 38,160 | 17,970 | 20,190 |
| 津久喜市 | 79.48 | 7,384 | 17,438 | 8,092 | 9,346 |
| 竹田市 | 477.53 | 9,009 | 21,748 | 10,068 | 11,680 |
| 豊後高田市 | 206.24 | 9,568 | 22,590 | 10,690 | 11,900 |
| 杵築市 | 280.08 | 12,107 | 29,677 | 14,304 | 15,373 |
| 宇佐市 | 439.05 | 22,614 | 55,572 | 25,994 | 29,578 |
| 豊後大野市 | 603.14 | 14,254 | 35,883 | 16,578 | 19,305 |
| 由布市 | 319.32 | 13,270 | 33,842 | 15,990 | 17,852 |
| 国東市 | 318.08 | 12,112 | 28,027 | 13,298 | 14,729 |
| 姫島村 | 6.98 | 877 | 1,938 | 915 | 1,023 |
| 日出町 | 73.32 | 11,019 | 28,108 | 13,364 | 14,744 |
| 九重町 | 271.37 | 3,433 | 9,377 | 4,429 | 4,948 |
| 玖珠町 | 286.51 | 5,957 | 15,538 | 7,489 | 8,049 |

資料:国土地理院,系統計画室

図1 地域の人口の動向

本学は大分市野津原地区の北東、同地区が旧大分市と隣接する位置に立地し、大学のさらに北東には富士見が丘団地が広がる(図2、3)。両地区とも高齢化率が高く、一人暮らし高齢者や高齢者のみ世帯の増加という現代の日本が直面する共通の課題が、典型的に顕在化している。このような2地区において、看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業は展開された。



図2 本学の立地

【野津原地区】

東西 12.5 km、南北 7.5 km の同地区には約 4,500 人が住んでいる。高齢化率は、

平成 27 年 3 月には 41.8%と高い（図 4）。地域で支えあう習慣はあるが、若者が減少しており、これまで高齢者を支えてきた人たちも、高齢者になりつつある。また、山間部ほど高齢化が進み、集落が小規模で分散している。公共の交通機関がほとんどないため、高齢者にとって自力では、病院、スーパー、郵便局等へのアクセスが難しい。つまり、人口の減少が深刻で、高齢者の孤立化が課題となっている。



図 3 野津原地区の遠景と富士見が丘団地の航空写真

【富士見が丘団地】

昭和 40 年代に開発されたいわゆる郊外型団地で、東西 2.0km、南北 1.3km にわたり一戸建て住宅が建ち並び、平成 27 年 3 月の人口は約 7,500 人である。開発から約 40 年が経過して高齢化が著しく、その進行も速い。平成 27 年 3 月の高齢化率は 35.7%で、前年比 1.7%増となっており（図 4）、一人暮らし高齢者や高齢者のみの世帯が多い。

3つある自治会やそれらの上部組織である連合自治会は、介護予防プログラムに積極的に取り組んでいる。ただし、坂と階段が多い地形であるため高齢者が外出しにくく、虚弱な高齢者が公民館で開催されるサロンに徒歩参加することは容易でない。介護予防のイベントを行っても特定の人しか集まらないため、自宅に閉じこもっている人にどのようにアプローチをするかが課題となっている。

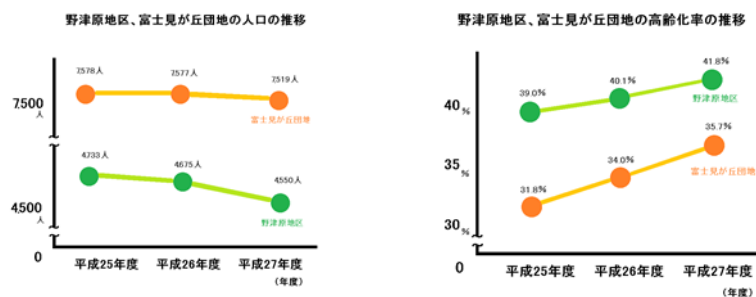


図 4 両地区の人口と高齢化の推移

このように両地区とも、高齢化し孤立傾向にある住民の健康と社会参加を、どのようにすれば維持できるかということが喫緊の課題となっている。しかしこれは、見方を変えれば、このような地区に隣接した大学で学ぶ看護学生にとって、「日本社会全体の健康課題の縮図が、身近な地域において典型的に存在する」ということでもある。そこで、もし看護学生がこれらの地域に住む高齢者と関わりながら、その健康と社会参加を支える条件について学ぶことができれば、それは今後の日本における健康課題について考えるための格好の布石となる可能性がある。つまり、病院だけでなくあらゆる場で必要とされる看護を学ぶため、「暮らし」というフィールドに立って（日本看護協会ステートメント）地域包括ケアを考えるために、看護職を目指す学生が大学キャンパスを離れ、地域へのアウトリーチ活動を通して学ぶことが有益なのではないかということである。さらに、学生が地域社会に入り込むことにより、高齢者の健康と在宅生活・社会参加を支えるために地域全体で共有すべき課題（高齢者個人個人の心がけに帰するような課題ではなく）を明らかにすることができれば、そこから新しいまちづくり（地域づくり）の方策を提案できる可能性もある。

以上のように、①本学が公立大学として地域に貢献する使命を負っていること、②本学が看護系の単科大学であること、および、③高齢化の進行が著しい地域に本学が立地していることを背景として、看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業が着想された。構想の詳細を、次節に述べる。

3. 事業の計画

3. 1. 構想と目的・目標

前述のように、全国的に高齢化がますます進み、いわゆる地域包括ケアの重要性が高まってはいるが、従来の看護学教育では病院等の施設における実習が重視されてきた結果、看護学生が在宅の人々の健康と生活について学ぶ機会が十分とはいえない状況にあった。本学が公立の看護系単科大学であることを考えると、本学が地域と連携して、学生がこれらのことをより深く学ぶためにアウトリーチ活動を行うことは、本学が地の拠点大学として立つために重要だと考えられた。そこで、本学における本事業を以下のように構想し、看護学生による予防的家庭訪問実習を通したまちづくり事業と呼ぶことにした。

予防的家庭訪問実習では、看護学部生が1～4年生でチームを組んで、大学周辺地域に住む高齢者を定期的に訪問する。同じ高齢者から続けて協力が得られれば、学生は4年間通して継続的に訪問することとなる。この実習の目的と目標を、次のように考えた。

- ①高齢化の進む地域で孤立しやすい75歳以上の高齢者に対し、学生が定期的かつ継続的に家庭訪問する実習を行う。このアウトリーチを通して、高齢者の健康の課題を早期に把握し、できるだけ続けて自宅で自立して暮らせるよう機能低下予防を図る。ただし、早期に対策が必要な事例については、当該高齢者の了解を得て、然るべき機関につなぎ解決を図る。
- ②見出された課題のうち地域で共有して解決すべきものは、これを学生が集約し、公民館等での健康相談や保健指導等に結びつけたり、行政や地域の自治会、高齢者クラブ等の組織および団体と大学が定期的に話し合う中で方向性を共に考えたりする。

上記の実習を展開するには、行政や地域自治会等の組織・団体と緊密に連携する必要がある。しかし、学部生が4年間をかけて高齢者の生活の場を訪問する、という看護学実習は過去に例がない。そこで、準備期間を設けて慎重に計画を立てた上で、本格的に事業を稼働させる計画を立てた。すなわち、平成25～26年度を準備期間と位置づけ、平成27～29年度には本格的に（全学生と全教員で）実施することとした。

この準備期間に、大学が地域と連携して本事業を推進するための学内外体制構築という、教育改革・ガバナンス改革を進めた。これらについては、事業の進捗の中で、PDCAプロセスを経て随時見直しを図った。

教育改革の面では、試行的に実施した実習の結果をふまえ、学部教育カリキュラムの改定作業を進めた。また、学内でCOCプロジェクト（後に予防的家庭訪問実習プロジェクトと改称）を組織し、本実習の進め方の検討および地域連携の戦略の検討を開始した。

これと並行して、地域貢献の計画を検討した。学生は、個々の協力者の自宅を訪問することに加え、地域で事業報告会を開催し、高齢者の生活と健康に関する学生からの気づきや提案を地域に発信する、という計画を立てた。また、本事業を通して地域と大学が連携する場をつくり、共に地域の活性化をはかる目的で、会議や事業報告会、地域交流会を開催する計画を立てた。ただし事業を通して地域の課題や地域住民の健康課題が抽出された場合は、その都度、会議の場や会議構成メンバーとの話し合いを通し、住民や地域への還元を図った。

以上の事業に関する評価については、次のように考えた。①高齢者が本実習に協力することで、その健康と生活にどのような影響が生じるかを確認し、これを基に高齢者の健康維持・介護予防のための知見を得る。②地域のケアネットワークの課題を明確にして、解決への手がかりを得る。③本実習を通して学生に「地域で生活する高齢者を理解する視点や分析能力」が備わるかどうかを確認する。このうち①②については、大学教員が共同研究を行って、事業協力者の健康指標の経年変化を追跡調査し、事業協力者以外の対照群と比較する計画を立てた。また③については、学生の実習記録の分析や、学生アンケート等から評価する計画とした。

3. 2. 推進体制

1) 学内事業推進体制

(1) COCプロジェクトと看護研究交流センター

本事業を推進するため、学内にCOCプロジェクトを立ち上げ（図5）、地域看護学研究室の特任教授をはじめ多分野の教員がこれに参加した。年に数回の会議を随時開催し、事業運営にあたっての情報共有や、課題の検討、事業の計画、中間評価、および事業評価項目の検討などを行った。また、予防的家庭訪問実習を運営するにあたっての詳細な計画、事業展開について決定した。

さらに、同プロジェクト事務局を看護研究交流センターに設置して、大学COC事業の実務（表3）を中心的に担った。同センターは大学と社会の窓口として設けられた組織で、専任教員・非常勤事務職員が配置され、傘下の複数のチーム（学内の教職員が兼任）がそれぞれ業務分担して活動してきたものである。本事業予算を充てて同センターへティーチングアシスタント（TA）等を追加配置し、さらに全学教員によって（2）以降に述べる体制を構築することとした。

(2) 実務部門

この部門では、学生や教員のチーム編成を行うとともに、実習記録を電子化して管理するシステムを構築した。

(3) 教育部門

看護学系と人間科学系（非看護学系）の教員各1名が、複数の学生チームと協力者（高齢者）を担当し、学生指導に当たることとした。担当教員は原則として、年度の初回訪問および最終訪問に同行し、学生指導と協力者への対応を行った。学生や協力者に何か問題等が発生した場合には、担当教員間で協議し、必要に応じて単位認定研究室代表者に連絡・相談した。地域の関係者と協議等が必要な場合には、看護研究交流センターも連携した。学生の訪問日数（回数）、訪問内容、態度、記録、レポート等に関する評価を年度末に行い、評価表に入力した。

単位認定担当には、各学年に2つずつ研究室を割り当てた。学生チームの担当教員による学生評価と、学生の記録等に基づき、評価と単位認定を行うこととした。また、本実習に関係する講義、演習、オリエンテーション等を検討した。さらに、実習全体の教育効果等を評価する方法についても検討した。

この他、緊急時の対応や、後述の事業報告会（地域交流会）について、準備・指導を行った。家庭訪問マナーに関する指導も、オリエンテーションの際に実施した。

(4) 事業評価部門

本事業が地域志向性の高い教育として成果を挙げているかどうか検討するため、協力者・学生・地域に対する、事業の評価指標と調査方法を検討した。

(5) 訪問実習学内検討会

事業推進にあたって全教員が参加し、事業展開についての情報共有や、事業運営にあたっての課題検討、計画の検討等について討議するために、年1回年度末に開催した。

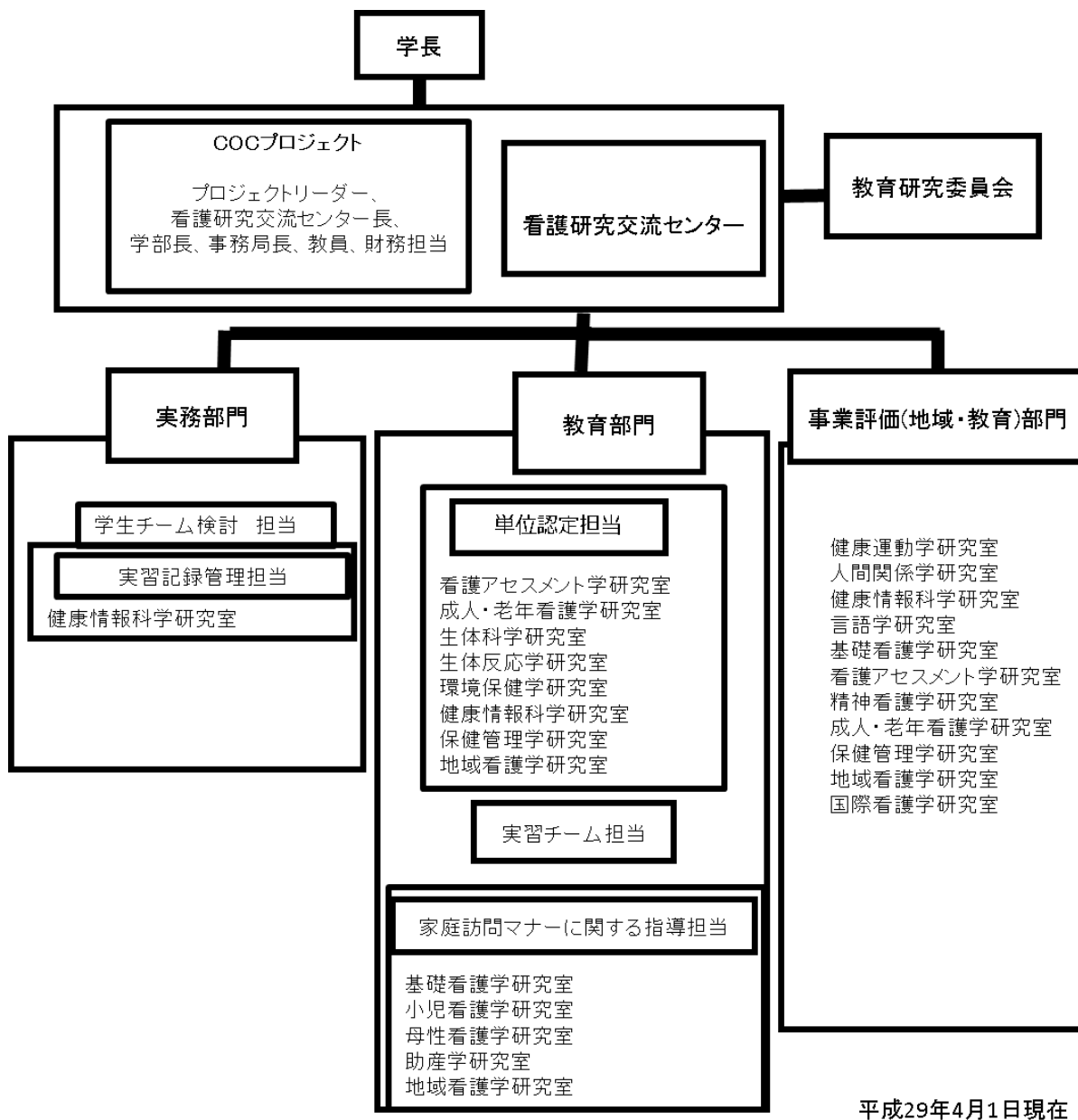


図 5 学内の事業推進組織体制図

表 3 看護研究交流センターの主な役割

-
- ①地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)に関する会議の開催
 - ②予防的家庭訪問実習の協力者のリクルート
 - ③予防的家庭訪問実習の協力者や地域や連携自治体との窓口
 - ④予防的家庭訪問実習の協力者・学生・学生チーム担当教員のサポート
 - ⑤看護研究交流センター教職員による年度終了時の訪問
-

2) 学外との連携体制

(1) 事業推進会議

地域のステークホルダーに幅広く、事業推進会議への参加を呼びかけ、会議の要項を定めて、この会議の下で、事業運営にあたっての情報共有や、課題の検討、事業の計画、中間評価、および事業評価などを行うこととした（表4）。

表4 学外の事業推進会議関係機関・団体

| |
|------------------------------|
| 野津原地区関係 |
| 野津原地区自治委員連絡協議会 |
| 野津原地区社会福祉協議会 |
| 野津原地区民生児童委員協議会 |
| 野津原地区地域包括支援センター |
| 大分市市民部野津原支所 |
| 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター野津原健康支援室 |
| 富士見が丘団地関係 |
| 富士見が丘連合自治会 |
| 横瀬地区社会福祉協議会 |
| 横瀬地区民生児童委員協議会 |
| 植田西地区地域包括支援センター |
| 大分市市民部 |
| 大分市保健所西部保健福祉センター |
| 大分郡市医師会 |
| 大分県看護協会 |
| 大分県国民健康保険団体連合会 |
| 事業課 |
| 大分市 |
| 福祉保健部長寿福祉課 |
| 保健所健康課 |
| 大分県 |
| 福祉保健部福祉保健企画課 |
| 福祉保健部医療政策課 |
| 福祉保健部高齢者福祉課 |

平成29年4月1日現在

(2) 幹事会

事業推進会議の開催前には予備的作業として、同会議の幹事会を年3回開催し、主に行政関係者と事業推進にあたっての打ち合わせ、情報共有や課題の検討などを行った(表5)。

表5 幹事会関係機関

| |
|------------------------------|
| 野津原地区関係 |
| 野津原地区地域包括支援センター |
| 大分市市民部野津原支所 |
| 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター野津原健康支援室 |
| 富士見が丘団地関係 |
| 植田西地区地域包括支援センター |
| 大分市市民部 |
| 大分市保健所西部保健福祉センター |

(3) 地域連絡会議

両地区それぞれの自治会等の関係者と地域連絡会議を年3回ずつ開催し、事業運営にあたっての情報共有や、課題の検討、事業の計画、中間評価、および事業評価項目の検討などを行った(表6)。

表6 地域連絡会議関連機関

| |
|------------------------------|
| 野津原地区関係 |
| 野津原地区自治委員連絡協議会 |
| 大分市市民部野津原支所 |
| 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター野津原健康支援室 |
| 富士見が丘団地関係 |
| 富士見が丘連合自治会 |
| 横瀬地区社会福祉協議会 |

年間の会議の流れの概略を、図6に示す。

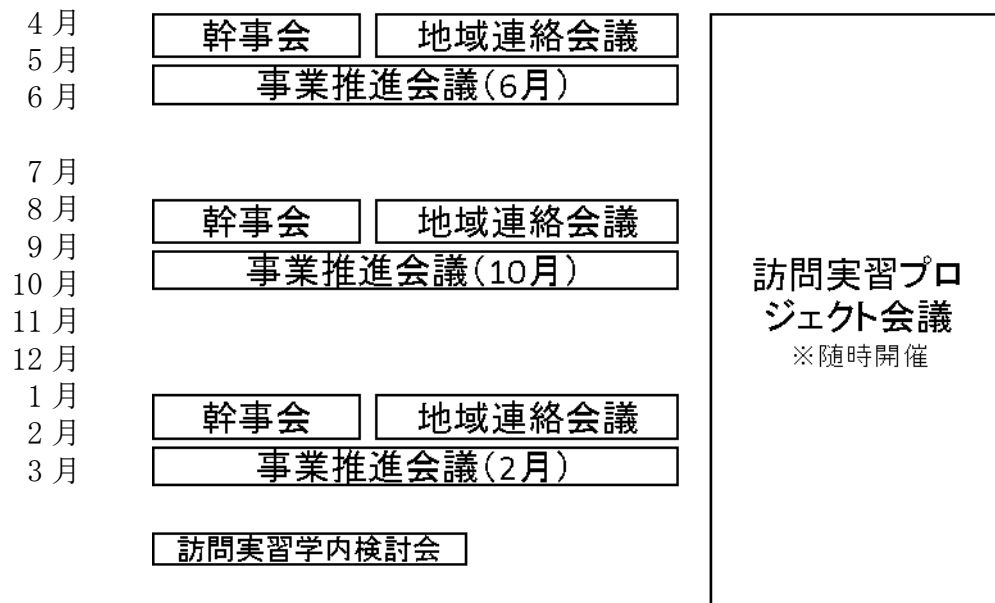


図6 年間の会議の流れ

4. 事業の展開

4. 1. 準備段階（平成 25～26 年度）

1) 平成 25 年度

(1) 体制構築

まず準備作業として、前項で述べた学内外の事業推進体制の構築を始めた。学内ではCOCプロジェクト会議等の話し合いを重ねた（表7）。同プロジェクトは、本事業の運営・事業計画検討・事業評価計画などに係る中心的役割を果たすものとして、以前から活動してきた学内プロジェクト（健康増進プロジェクト）を引き継ぐ形で立ち上げられた。看護研究交流センターは、COCプロジェクト事務局として事業の計画・運営・評価などを行うとともに、地域や自治体との窓口として関係機関や協力者との連携を図ることとした。地域看護学研究室特任教授と、同センター専任准教授が、これらの中心となった。また並行して、学部教育カリキュラム改正のための学内検討会を設置した。

表7 学内会議の開催状況

| | | |
|----------|-----------------|----------------------------|
| 平成 25 年度 | 4 月 第 1 回 | 事業に関する学内会議 |
| | 5 月 第 2 回 | 事業に関する学内会議 |
| | 8 月 27 日 第 3 回 | 事業に関する学内会議 |
| | 9 月 4 日 第 1 回 | 学内全体説明会 |
| | 10 月 29 日 第 1 回 | 看護研究交流センター打ち合わせ会議 |
| | 10 月 30 日 第 2 回 | 看護研究交流センター打ち合わせ会議 |
| | 11 月 5 日 第 3 回 | 看護研究交流センター打ち合わせ会議 |
| | 11 月 8 日 第 4 回 | 看護研究交流センター打ち合わせ会議 |
| | 11 月 19 日 第 5 回 | 看護研究交流センター打ち合わせ会議 |
| | 2 月 24 日 第 1 回 | COC 予防的家庭訪問実習学生チーム検討 SG 会議 |
| 平成 26 年度 | 4 月 22 日 第 1 回 | 単位認定研究室会議 |
| | 4 月 23 日 第 1 回 | 看護系全体会議 |
| | 5 月 2 日 第 1 回 | COC プロジェクト事務局会議 |
| | 5 月 8 日 第 1 回 | 予防的家庭訪問実習マナーに関する担当者会議 |
| | 5 月 14 日 第 2 回 | COC 単位認定研究室会議 |
| | 5 月 19 日 第 2 回 | COC 学生グループ検討 SG 会議 |
| | 5 月 27 日 第 2 回 | COC 予防的家庭訪問実習マナーに関する担当者会議 |
| | 5 月 28 日 第 2 回 | COC プロジェクト会議 |
| | 6 月 4 日 第 3 回 | COC プロジェクト事務局会議 |
| | 6 月 11 日 第 3 回 | COC 事業評価代表者会議 |

| | |
|-----------|--------------------------|
| 6月27日第4回 | COC事業評価代表者会議 |
| 7月11日第4回 | COCプロジェクト事務局会議 |
| 7月15日第3回 | COC予防的家庭訪問実習マナーに関する担当者会議 |
| 7月24日第5回 | COC事業評価代表者会議 |
| 7月30日第1回 | COC事業評価会議 |
| 8月8日第3回 | COC学生グループ検討SG会議 |
| 8月11日第3回 | COC学内窓口担当者会議 |
| 10月15日第2回 | COC予防的家庭訪問実習学内検討会 |
| 12月15日第4回 | COC学内窓口担当者会議 |
| 12月17日第3回 | 看護系全体会議 |
| 2月4日第7回 | COCプロジェクト事務局会議 |
| 2月24日第5回 | COC学内窓口担当者会議 |
| 2月26日第4回 | COC予防的家庭訪問実習マナーに関する担当者会議 |
| 3月11日第8回 | COCプロジェクト事務局会議 |
| 3月19日第3回 | COC予防的家庭訪問実習学内検討会 |

さらに、事業対象地区（野津原・富士見が丘団地）との事業推進体制の構築に着手した（表4）。大学生が予防的家庭訪問実習を行うことにより、地域高齢者の状況が明らかになり、より深く地域の現状がわかる可能性がある。本学の教育研究活動を通して、地域の問題を吸い上げ、明確にし、本学と地域全体でその課題に対応する方策を考え、解決策に結び付けることが重要である。そこで前項で述べたように、事業対象2地区の地域関係者との会議体制を構築した（図7）。また、事業報告会（予防的家庭訪問実習報告会）を、本事業の成果や課題を地域と共有するための機会として、計画した。報告会では、学生が家庭訪問での学びや明らかになった高齢者の生活機能や健康状態の実態についての報告を行い、自立して生活しつづけるための対策などを提案するとともに、必要に応じて保健・医療・福祉のトピックスなどの健康教育を実施することを考えた。会議開催実績を表8に示す。

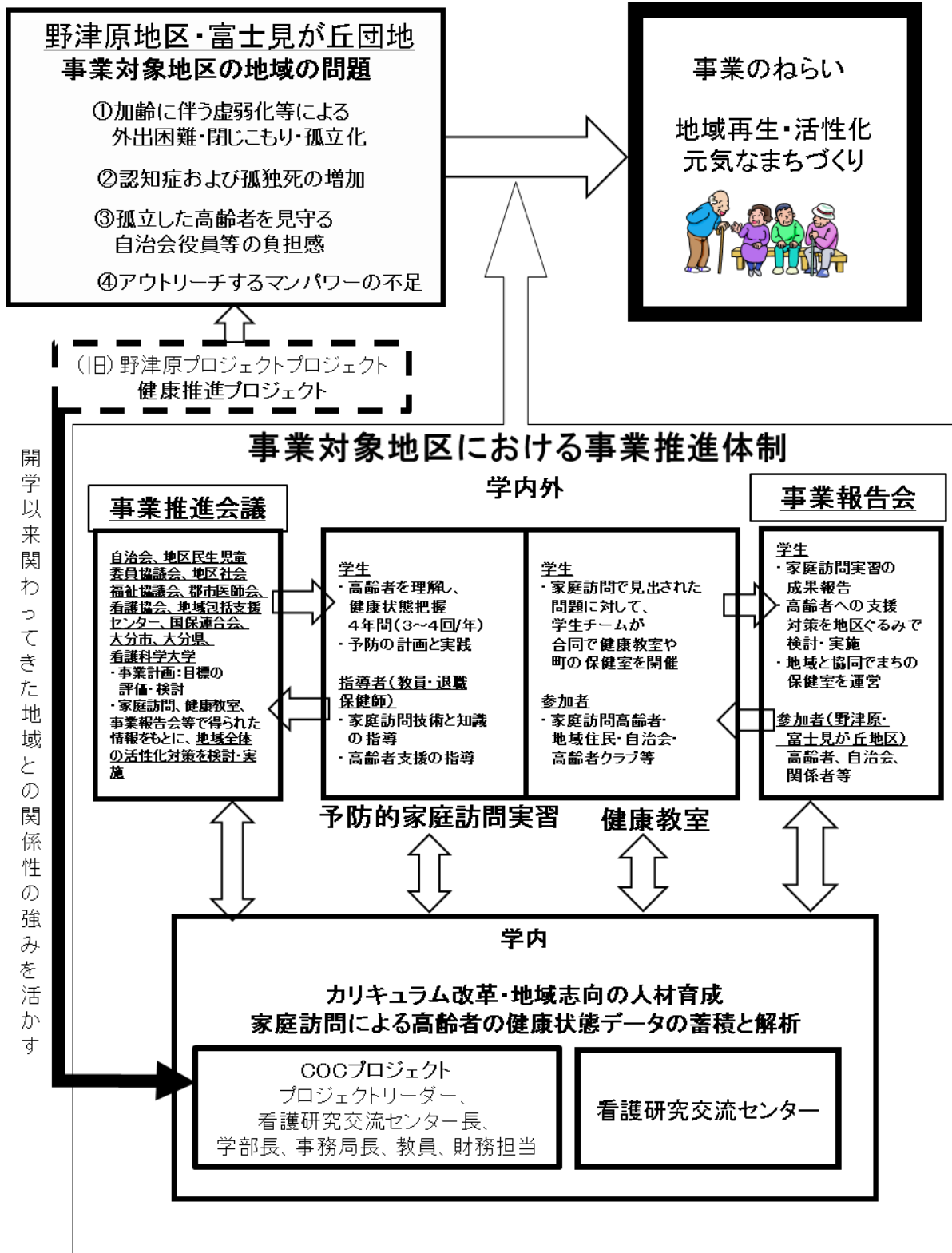


図7 地域との連携と学内体制

表 8 事業関連会議の開催日と参加者数

| 年度 | 事業推進会議 | 幹事会 | 地域連絡会議 |
|----|-------------------------------|-----------------------------|--|
| 25 | 10/15 (30) , 2/18(38) | 10/8(6), 11/14(10), 2/7(10) | 野津原 10/29(5), 11/5(3) 富士見 10/30(4), 11/8(4) |
| 26 | 6/10(34), 10/14(40), 2/17(38) | 6/3(12), 9/24(11), 2/6(13) | 野津原 5/29(7), 10/2(5), 2/5(5) 富士見 6/1(7), 2/3(6) |
| 27 | 6/9(37), 10/13(34), 2/9(34) | 6/2(13), 10/2(10), 2/1(11) | 野津原 5/26(7), 10/2(4), 1/25(5) 富士見 5/26(8), 10/2(5), 1/25(5) |
| 28 | 6/14(34), 10/11(32), 2/14(33) | 6/2(11), 10/3(10), 2/6(11) | 野津原 5/30(5), 10/6(6), 2/2(7) 富士見 5/30(5), 10/6(7), 2/2(7) |
| 29 | 6/13(33), 10/10(30), 2/13(26) | 6/8(12), 9/26(10), 1/30(6) | 野津原 5/29(7), 10/2(5), 2/1(5) 富士見 6/1(7), 10/2(6), 2/1(5) |

()内は参加人数

(2) コンサルテーション

一方、平成 25 年度には、コロラド大学名誉教授 (コミュニティ看護学) Dr. Kathy Magilvy を招き、エスノグラフィームソッドの勉強会を開催した (10 月 16 日、於：大分県立看護科学大学・地域看護学研究室、出席者：教員 8 人、大学院生 2 人)。地域看護学研究室、看護研究交流センター、及び国際交流委員会からの参加があった。大学院生 2 人が地域看護診断の発表 (日出町) を行った。この事前学習会に引き続き、Magilvy 博士が同行して、下記の地区踏査を行った。同博士には平成 26 年度以降も引き続き、コンサルテーションを受けることとした。

【地区診断実施日程】

11 月 22 日 富士見が丘団地 : Dr. Kathy Magilv 同行調査
 11 月 24 日 野津原地区 : Dr. Kathy Magilv 同行調査

(3) テスト訪問

この結果もふまえて、予防的家庭訪問実習の目標を、暫定的に次のように設定した。

- 1) 在宅で生活する高齢者を生活者として全体像をとらえることができる
 - 2) 高齢者とコミュニケーションを取ることができる
 - 3) 高齢者の健康・生活機能の在り様を観察・アセスメントすることができる
 - 4) 必要な支援を考え、必要に応じて情報提供やケアを行うことができる
 - 5) 訪問実習で得られた情報や訪問結果を適切に記録することができる
- そして、学生有志に教員と大分市保健師が同行し、地域から紹介を受けた協力者2名の自宅へのテスト訪問を行った。

a) 富士見が丘団地

平成 25 年 12 月 18 日 15:00～16:00

訪問協力者：70 代男性

参加者：学生 2 人、同行教員 3 人、大分市保健師 1 人

実施後の感想、振り返り等：

- ・年単位の訪問回数では少ない。
- ・学生や高齢者の負担を考えると年単位の訪問で回数も妥当ではないか。
- ・1～4年まで集まると、訪問だけでなく事前学習やまとめをする時間などの時間調整が難しい。
- ・学生が長期間、病院実習に行く間の訪問はどうするか。
- ・協力者の家族とどのような関わりをもったらよいか。
- ・訪問先への交通手段、交通事故などが心配。
- ・地域での生活者を知ること、病院実習の時に退院後の生活がイメージでき、退院指導につなぐことができる。
- ・病院実習では退院に向けて指導するが、実際に家でうまくできているか分からない。家での生活を知ることができれば、家にあるもので代用、工夫するなどいろんなアプローチができる。

b) 野津原地区

平成 25 年 12 月 19 日 14:00～15:00

訪問協力者：80 代女性

参加者：学生 2 人、同行教員 3 人、大分市保健師 1 人

実施後の感想、振り返り等

- ・対象者は運動も食事面も完璧だった。人生の大先輩から学べた。
- ・病院実習では、元気な人のもとへ行く機会は少ない。家庭では残存機能を見ることができる。元気な人を見てから病院実習にいけば、入院患者を生活者とし

てみることができる。

- ・退院指導を考えた時に、生活導線や環境などがイメージでき具体的に关われるかもしれない。生活が想像しやすい。
- ・マナーについて統一して教えてほしい。4年生は地域実習に行くので、見る視点が身につく。
- ・在宅実習とも異なり、医療の介入の必要のない高齢者だったので、健康な高齢者に対して予防的になにができるか考える機会になると思う。
- ・病院実習で退院指導を行う際に、実際の生活がイメージができなかったが、生活している高齢者を知ることで、指導も具体的になると思う。
- ・地域の関わりがしっかりあることがわかった。健康な高齢者の方と関わって、予防の視点で関わるのが家庭訪問のいいところだと思った。

上記のテスト訪問実習の終了後、学生の訪問記録およびレポート、同行した教員の観察記録等を参考に評価会議を開催し、平成26年度試行訪問の計画を検討した。テスト訪問実習の結果は、「事業報告会」と事業推進会議」に報告することとした。協力者宅までの交通手段は徒歩または自家用車とすること、学生には服装や基本的な訪問マナー等の事前オリエンテーションを行うこととした。

(4) 事業報告会

テスト訪問実習を通して得られた、訪問実習の方法、内容、評価指標等の手ごかりを、次年度に向けて報告し、さらに効果的な事業について検討を行うために、以下のように事業報告会を行った。

a) 開催日時・場所

野津原地区：平成26年1月23日（木）15:15～15:45 野津原支所

富士見が丘団地：平成26年1月22日（水）10:00～10:30 富士見ヶ丘公民館

b) 参加者

野津原地区 9人

富士見が丘団地 20人

c) 内容

家庭訪問の参加者による報告

d) 参加者の感想

野津原地区：

- ・元気な高齢者を対象とした実習が初めてだったので新鮮だった
- ・自宅を訪問することが初めてであり、地域住民の生活を知ることができた。
- ・対象者の生きがいや強みを生かしながら学生が関わることで、地域での活動が更に活発になるのではないかな。

富士見が丘団地：

- ・従来の実習では地域での生活を見ることが出来なかった
- ・今回の実習を通して、自宅での様子、家族の様子を知る機会になった。
- ・1～4年生までがこの実習を通して交流し学ぶことで共通点が得られるのではないかな。

e)意見交換

- ・地域包括支援センターとしても、高齢の住民すべてに関わることが出来ないため、学生が訪問することで高齢者が困っている事などに気づいてもらえる良い機会となる。
- ・引きこもりや関わりの少ない人も地域にはいるため、そのような人のもとに学生が訪問し状況を把握して頂けるのは助かる。
- ・このような事業をすることで、今まで見えなかったことが見える様になることが期待される。
- ・学生が町内を歩き挨拶の声掛けをし合うだけでも高齢者にとっては刺激になるのではないかな。

2)平成26年度

(1) 試行訪問

前年度のテスト訪問の結果に基づき、26年度には8チームの学生による試行訪問を行い、段階的に検討を進めた。この訪問については、学部カリキュラムにおける自由科目(学部長が毎学期指定する選択科目)として単位を取得できるような位置づけ、以下のように実施した。

自由科目「予防的家庭訪問実習」

8チーム(1チーム4～5人)の学生が、8人の実習協力者の自宅へ半年間かけて訪問し健康状態の把握等を実施する。

a)目的：

予防的家庭訪問実習は、在宅で生活する高齢者を支えるため、高齢者の健康を継続した視点からとらえ、変化に応じた援助を提供する重要性を学ぶことを目的としている。平成27年度の本導入に先立ち、訪問実習を行い、訪問実習の

方法、内容、評価指標等を確認し、効果的な実習環境を整えるための資料を得ることを目的とする。

学年別の訪問実習目標

- 1) 在宅で生活する高齢者を生活者として全体像をとらえることができる
- 2) 高齢者とコミュニケーションを取ることができる
- 3) 高齢者の健康・生活機能の在り様を観察・アセスメントすることができる
- 4) 必要な援助を考え、必要に応じて情報提供やケアを行うことができる
- 5) 訪問実習で得られた情報や訪問結果を適切に記録することができる

b) 履修学生、実習期間

○履修学生

1年14人、2年6人、3年6人、4年7人（計33名）

担当教員16人

○期間

平成26年7月～平成26年12月

c) 実習協力者

○野津原地区4名（男性2名、女性2名）

○富士見が丘団地4名（男性1名、女性3名） 計8人

d) 実習オリエンテーション（平成26年7月14日）

履修学生33人が参加し、各学年の実習目標や実習内容の確認と、協力者に敬意をもつ訪問を行うためのマナーと礼儀について理解を深めるために、開催した。

e) 実施状況

平成26年7月30日～平成27年1月15日に、延べ27回（1チーム平均3.5回）の訪問を行った。

○Aチーム（担当：野津原地区在住 70代後半 女性）

○Bチーム（担当：野津原地区在住、80代前半、男性）

○Cチーム（担当：富士見が丘在住、70代後半、女性）

○Dチーム（担当：野津原地区在住、70代後半、男性）

○Eチーム（担当：野津原地区在住、70代前半、女性）

○Fチーム（担当：富士見が丘在住、70代後半、女性）

○Gチーム（担当：富士見が丘在住、80代後半、男性）

○Hチーム（担当：富士見が丘在住、80代前半、女性）

f) 協力者の感想

- ・若い人と会話して笑うことが増えてよかった。
- ・ノートに書き綴っている面白い話を聞いてくれる人ができてよかった。
- ・学生に同郷の人がいて話が合う。嬉しい。
- ・1年生がとても気が利く。
- ・息子がとにかく喜んでくれている。
- ・若い子が来てくれるのは嬉しい。
- ・和やかに話ができるだけでもいい。
- ・人が訪ねてくれることはよいこと。こっちも助かっている。
- ・孫が来たようで嬉しい。
- ・若い人との交流は必要な事なので、この実習はとてもよい。
- ・若い人に聞かせたいことが多いので、来てくれるのは嬉しい。
- ・4年生が立派。下級生の見本となっている。

(2) コンサルテーション

前年に続き Dr. Magilvy を招き、効果的な事業運営に関する助言を受けた（平成 26 年 11 月 14 日 13：00～16：00、於：大分県立看護科学大学中会議室）。出席者は 10 人であった。以下の助言を受けた。

- ・高齢者へのインタビューについて、「事業に参加して良かったことはありますか」、「本事業が役立ったこと がありますか」等オープンな尋ね方をすること。
- ・高齢者への質的調査では参加観察は不要である。
- ・学生へのインタビューは、「実習を経験してどのように感じましたか」、「実習を通して何が変わりました か」、「下級生に実習をどのようにすすめますか」、「下級生に伝える実習の注意点やアドバイスはありますか」等の尋ね方をすること。
- ・学生評価方法については、実習記録による評価、教員と学生のフォーカスチームインタビュー調査が望ましい。
- ・教員へのインタビューは、「COC 実習と既存の実習はどのような違いがあるか」、また、「それは、なぜ 違うと思ったか」等の尋ね方にすること。
- ・卒業後調査（カリキュラム評価）として、保健師を目指した人数、在宅看護や老年看護に就職した人数を検証 すること。

(3) 事業報告会

前年度に引き続き、試行訪問について学生の発表会を行い、地域関係者に参加を求めた。

a) 日時・場所

野津原地区：平成27年1月21日 野津原支所
富士見が丘団地：平成27年1月28日 富士見ヶ丘公民館

b)参加者

野津原地区 36人
富士見が丘団地 87人

c)内容

学生の家庭訪問結果の報告（ポスター発表）

d)参加者の感想

○野津原地区

- ・ 学生さんが訪問に来るうちに孫と話すような気持ちになり楽しくなりました。
- ・ 私のところの学生さんは、県外の学生さんや1年生も2人いましたが、グループのチームワークが良くて、毎回来てくれるのが楽しみでした。
- ・ 私は一人暮らしをしていますが、看護大学の学生さんが4人来てくれて、本当に良かったです。是非、また続けて来てほしいです

○富士見が丘団地

- ・ 握力の発表があったが、握力が体の筋力の代表というほど大事なものだとは思いませんでした。なぜ血圧と握力を測るのはわからなく、不思議だったので、とても参考になりました。
- ・ 自治会としては、この実習に期待しています。これからの高齢化社会に向けてお互い協力していきたいし、ぜひ長く続けてほしいと思います

e)意見交換内容

- ・ 協力者は、学生に見せる顔だけが一つの顔ではない。もっと多くのことを、いろいろな顔を見せてくれるようになると思うので、その点を広く捉えて頂きたい。
- ・ 今後この活動を広げながら、地域の活性化の起爆剤になるように頑張ってもらいたい。

(4) 学部教育のカリキュラム改正

いくつかの理由により学部教育のカリキュラムを改定する必要があり、学内で検討を重ねてきた。その結果、新カリキュラムでは、予防的家庭訪問実習を以下のように位置づけることとした。

a) カリキュラム改正の概要

従来の看護学実習は病院医療の場を中心に実施してきており、実習期間には限りがあるため、一人の人を長期間かけて看護するという視点が育ちにくい。この限界を打破するため、カリキュラムを改正して予防的家庭訪問実習を創設し、自宅で生活する高齢者を学生が4年間を通して担当し、継続的に訪問する過程で協力者への理解を深め、高齢者のニーズに合わせた支援ができることを目指した。

本学のカリキュラムは、4年間で看護師を教育するプログラムである。その間、6段階の臨地実習により看護実践能力の習得を図るが、これを改変して平成27年度から予防的家庭訪問実習を本格的に導入し、地域を志向したカリキュラムに変革した(図8)。

b) カリキュラム移行の計画

平成27年度入学生から適用するカリキュラムを、平成26年6月までに文科省に申請することとした。本事業で提案してきた予防的家庭訪問実習は、新カリキュラムにおける必修科目として位置づけた。平成24～26年度入学生についても、旧カリキュラムの科目の一部を読み替えて本実習をあてることとし、全学部で本実習を本格的に実施することとした。

このために、平成27年度からの本実習の要項等を整備し、さらに実習協力者の募集(試行期間の8人から80人に増加)を自治体関係者と協働で行うとともに、全学で実習に取り組む(全教職員が学生の指導に携わる)教育体制の構築を完了させることとした。

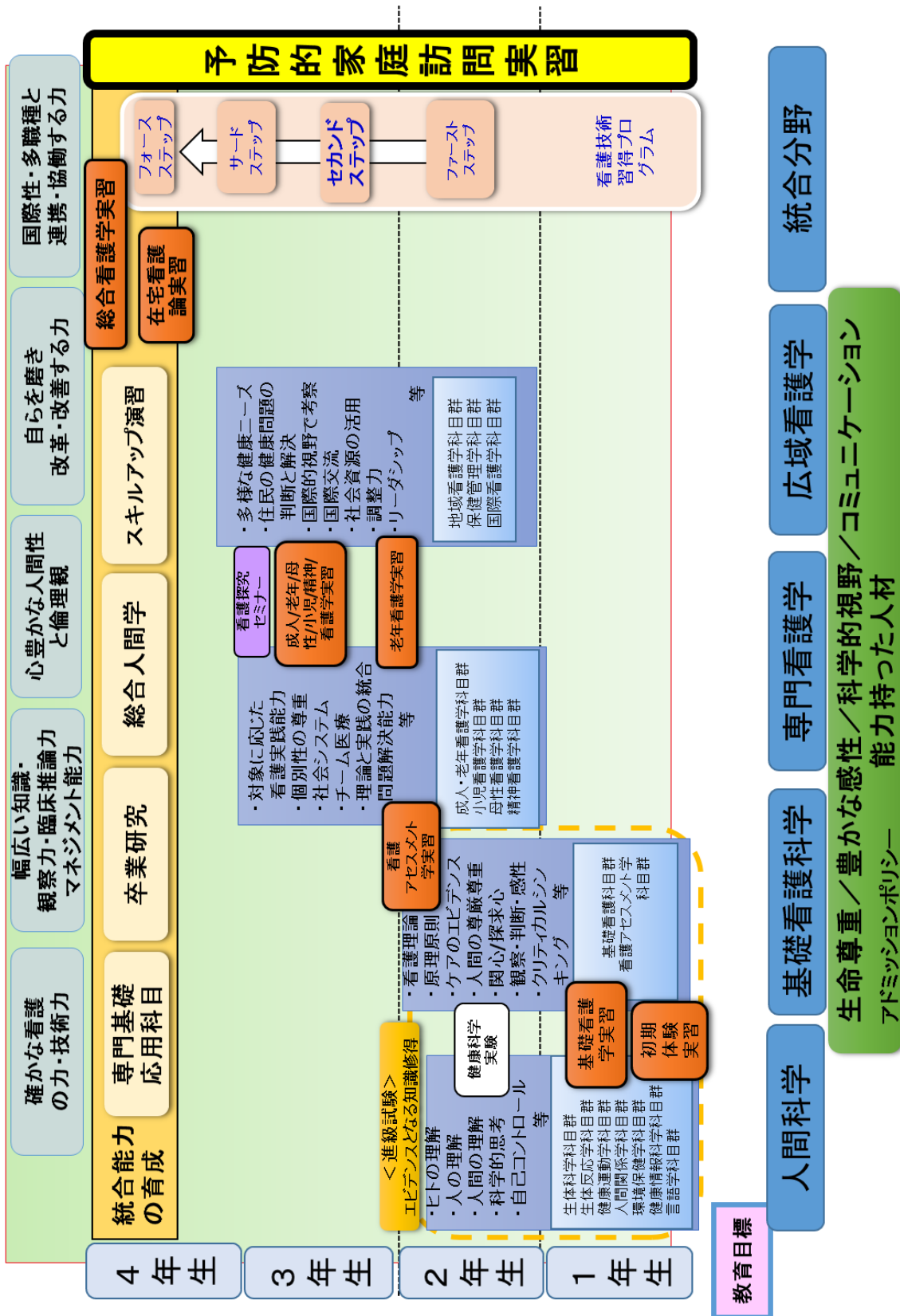


図8 改定カリキュラム

4. 2. 本格的実施段階（平成 27 年～平成 29 年度）

1) 体制構築

以上のような準備段階を経て、平成 27 年度から予防的家庭訪問実習を全学的に本格実施することとした。この段階における大学と事業対象地区（野津原・富士見が丘団地）との連携体制は、準備段階で構築した体制を基本的に持続することとした。学内での会議の開催状況を表 9 に示す。

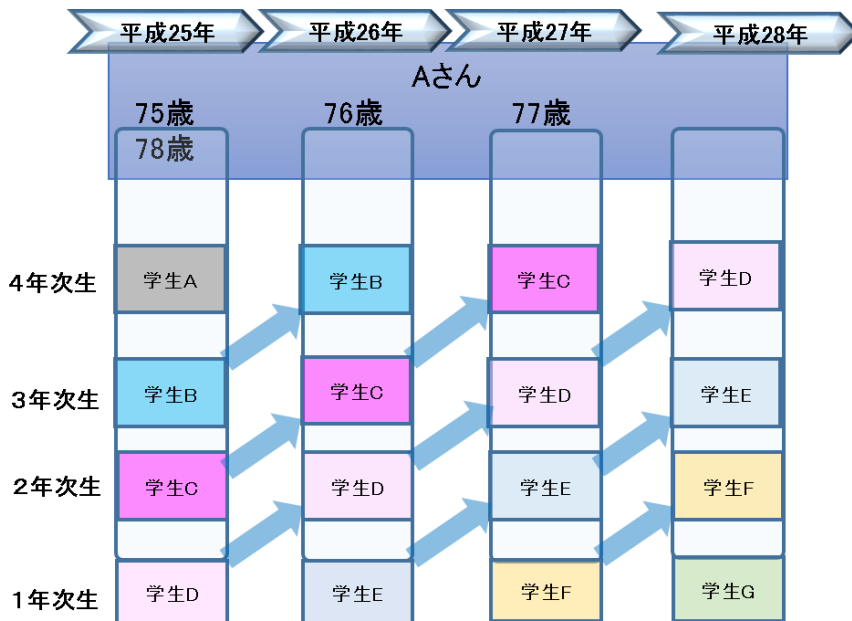
表 9 学内での会議の開催状況（2）

| | |
|-------------------|---------------------|
| 平成 27 年度 4 月 6 日 | 新任教員への予防的家庭訪問実習の説明会 |
| 5 月 22 日 | 第 1 回学内プロジェクト会議 |
| 9 月 24 日 | 第 2 回プロジェクト会議 |
| 10 月 13 日 | 第 1 回学内検討会 |
| 12 月 18 日 | 学内関係者会議 |
| 1 月 26 日 | 第 2 回学内検討会 |
| 平成 28 年度 3 月 22 日 | 第 1 回訪問実習プロジェクト会議 |
| 4 月 4 日 | 新任教員への予防的家庭訪問実習の説明会 |
| 5 月 31 日 | 第 2 回訪問実習プロジェクト会議 |
| 8 月 8 日 | 第 3 回訪問実習プロジェクト会議 |
| 10 月 3 日 | 第 4 回訪問実習プロジェクト会議 |
| 1 月 31 日 | 第 5 回訪問実習プロジェクト会議 |
| 2 月 28 日 | 平成 28 年度学内検討会 |
| 平成 29 年度 4 月 12 日 | 新任教員への予防的家庭訪問実習の説明会 |
| 6 月 8 日 | 第 1 回訪問実習プロジェクト会議 |
| 9 月 21 日 | 第 2 回訪問実習プロジェクト会議 |
| 10 月 23 日 | 第 3 回訪問実習プロジェクト会議 |
| 1 月 29 日 | 第 4 回訪問実習プロジェクト会議 |

2) チーム編成

本格的実施における予防的家庭訪問実習では、1 年次生から 4 年次生の縦割りで 4～5 人ずつのチームを構成することとした（図 9）。全学生が、80 チームのいずれかに所属し、学生は学年を超えたチームメンバーと共同作業を行うことで、他学年との交流や意見交換が可能となる。

チームの指導は、人間科学系と看護学系の教員がペアになって担当することとした（表 10）。各ペアが 2～3 チームを担当し、訪問の前後にアドバイスをしたり、年度初めおよび最終訪問の際に学生に同行したりすることが役割である。



予防的家庭訪問実習では、1年次生から4年次生の縦割りでチームを構成する（チーム人数4名）。学生は学年を超えたチームメンバーと共同作業を行うこととなり、他の学年との交流や意見交換が可能となる。

人間科学系と看護学系の教員がペアになり各チームの指導にあたる。各教員ペアは2～3チームを担当し、各訪問の前後にアドバイスをすると共に、初回および、その年度の最後には学生の訪問に同行する。

定期的の実習合同会議を開催し、教員間の意見調整・共通認識を図る。

図9 縦割り実習配置

表10 チーム構成と担当教員配置の一例

| チーム | 4年次生 | 3年次生 | 2年次生 | 1年次生 | 担当教員 |
|-----|------|------|------|------|----------------|
| 1 | Aさん | Bさん | Cさん | Dさん | M教授 (看護学系) |
| 2 | Eさん | Fさん | Gさん | Hさん | N助教 (人間科学系) |
| 3 | Iさん | Jさん | Kさん | Lさん | |

3) 学生オリエンテーション

実習全体の目的・目標や方法・留意事項などを記載した実習要項を印刷配布し、学生に本実習について説明するオリエンテーションを、新学期初めに開催した。

(1) 平成 27 年度

- ・平成 27 年 4 月 14 日 (火) 1・2 限/全学合同オリエンテーション
学部生 329 人参加
野津原地区自治委員連絡協議会の佐藤克治会長と、富士見が丘連合自治会の佐々倉幸義会長をゲストに招き、学生へのお話をいただいた。
- ・平成 27 年 4 月 14 日 (火) 3・4 限/グループワーク
- ・平成 27 年 4 月 15 日 (水) 1・2 限/訪問マナーについてのロールプレイ

(2) 平成 28 年度

- ・平成 28 年 4 月 13 日 (水) 1・2 限/全学合同オリエンテーション
学部生 331 人参加
大分市市民部野津原支所の渡邊信司所長と、大分郡市医師会の岩波栄逸理事(岩波内科クリニック院長)をゲストに招き、学生へのお話をいただいた。
- ・平成 28 年 4 月 13 日 (水) 3・4 限/グループワーク
前年度の実習状況から、マナー指導は割愛することとした。

(3) 平成 29 年度

- ・平成 28 年 4 月 12 日 (水) 1・2 限/全学合同オリエンテーション
学部生 331 人参加
両地区で学生訪問を受け入れてきた実習協力者各 1 名をゲストに招き、学生へのお話をいただいた。
- ・平成 28 年 4 月 12 日 (水) 3・4 限/グループワーク (図 1 0)



図 1 0 グループワークとロールプレイ

(4) オリエンテーションにおける学生の学び

学生アンケートからの抜粋：

- ・自分たちが気づけていない情報や観察しないといけない部分を他のチームから指摘され、そのことが必要であると気付くことができた。
- ・実習 1 年目にコミュニケーションを目標にして取り組んでいるチームが、他のチームで看護介入（塩分濃度の測定を継続的に行い指導につなげていたり、内服忘れのための防止にカレンダーを作成したりなど、）をしていることを知り、今年度自分たちも介入したいという意欲につながっている。
- ・他のチームと同じ協力者の問題点で悩んでいるチームが、他のチームの介入方法や協力者の方が変化したことを知り、自分たちのチームの訪問にも生かしたいという意見があった。

4) 実習の流れ

実習要項に従い、実習の年間の流れ（平成 27～29 年度）を表 1 1 に要約する。

表 1 1 実習の年間の流れ

| | |
|---------------------|---|
| (1) オリエンテーション | ①チームメンバーの顔合わせ・自己紹介をする。 |
| | ②学生と教員の訪問日時の調整を行う。年間を通して予め訪問時期の計画を立てる。他の実習期間を除き、学年ごとに家庭訪問実習の可能な期間が決まることから、2名以上で訪問できる日の案を2通り決めておく。 |
| | ③1案、2案の訪問予定日を、初回は担当教員から協力者へ連絡し、日程調整を行う。2回目以降は、学生が直接協力者と日程調整を行う。 |
| | ④訪問する自宅の場所と経路を確認し、交通手段を決定する。 |
| (2) 協力者と訪問日時 の調整 | ①初回訪問時は、教員から訪問日時の連絡を受ける。 2回目以降の訪問日程の調整は、4年生（リーダー）が協力者へ連絡する。 |
| | ②日程が決まり次第、担当教員へ連絡する。 |
| (3) 訪問前日まで | ①2回目以降は、前回までの家庭訪問記録に目を通し経過を把握する。 |
| | ②把握した内容をもとに、訪問する学生間で必ず事前カンファレンスを行い、今回の訪問の目的と実施内容、準備する資料等を明確にする。 |
| | ③事前カンファレンスの結果を担当教員に報告し、必要に応じて助言を受ける。 |
| | ④家庭訪問前日に協力者へ必ず連絡し、訪問日と時間を再度確認する。 |
| | ⑤訪問鞆の内容物品を確認する。 |

-
- (4) 訪問当日 (訪問前)
- ①家庭訪問出発前に、教員へ訪問目的を伝え、約束の時間に遅れないように出発する。
 - ②服装等を整え、訪問鞆を持参する。
 - ③天候が崩れそうな場合には、協力者に迷惑をかけないように雨具等も準備していく。
 - ④約束の時間に遅れそうな場合は、協力者に必ず電話を入れる。
 - ⑤道に迷った場合は、協力者に電話を入れて目印等を教えてもらう。
-
- (5) 訪問時 (不在の場合)
- ①協力者が不在の場合は、看護研究交流センターへ連絡する。
 - ②センターが対応し、再度学生へ連絡を行うまで、自宅前で待機する。
 - ③センターから連絡が入り、協力者が自宅に戻らない場合は、不在対応の手紙をポストに入れて帰校する。
 - ④帰校後、担当教員に不在であった旨を報告する。
 - ⑤後日、協力者へ連絡し、次回の訪問日程を調整する。
-
- (6) 訪問時
- ①挨拶と自己紹介をして、実習でお世話になることへの感謝の意を述べる。
 - ②毎日、どのように過ごしているかを尋ねながら、コミュニケーションをとっていく。また、会話の中から健康状態をアセスメントしたり、学生としてできる看護を行う。
 - ③場合によっては血圧測定を行う。条件が許せば握力測定等を行ってもよい。測定結果を協力者に伝え、記録をわたし、定期的に測定しながら経過をみていくことを伝える。
 - ④食事や運動、睡眠、外出等協力者の生活状況を話題にししながら、協力者が工夫している点なども聞く。
 - ⑤協力者から健康や医療に関することで質問された場合、学生として答えることができるものは答える。その場で答えられないものは、次回までに調べてくることでよいか確認をする。処方されている薬についての質問は、主治医にするよう促す。
 - ⑥概ね1時間以内で退席するよう心掛ける。協力者の体調や生活上の支障をきたさないよう状況を判断して、退席を告げる。
 - ⑦あらかじめ把握しておいた次回の訪問日や日程調整の予告をする。
 - ⑧退席時には、協力者の話が学生として学びとなったことや話してくれたことへのお礼を述べて、協力者の家を出る。
-
- (7) 訪問当日 (訪問後)
- ①帰校後、訪問した学生間で必ずカンファレンスを行い、学び、反省点、課題を明確にし、次回訪問時の計画（どのようにしたらよいか）を考える。
 - ②家庭訪問の状況とカンファレンス結果を必ず担当教員へ報告し、助言
-

を受ける。

③次回の訪問日時と訪問を行う学生を確認し、次回の計画等を申し送る。

-
- (8) 記録の提出
- ①家庭訪問記録（電子記録）を作成し、本実習専用サーバーkikiへ提出したことを、担当教員へ連絡する。
 - ②提出期限は家庭訪問の翌日までとする。
-

学生は一人当たり年4回以上訪問することとしたが、学生に責任のない事情で予定が変更になり4回訪問が果たせない場合には、代替学習（協力者に手紙を書く、入院先を見舞う、等）で補った。学年によって、他の実習等があるため訪問できない季節があり、年度初めから計画的に年間日程を考える必要がある。この計画性は年々高まってきた。

訪問記録は電子ファイルで提出し、協力者の情報シートと合わせ、外部と接続しない専用サーバーを備えて保管することとした。ただし念のため、協力者の氏名等の個人を特定できる情報は、記載しないルールにした。このサーバーは学内の端末からのみアクセスできるので、その回に訪問しなかった学生や、担当教員が、いつでも情報を共有できる環境になっている。

5) 協力者

学生訪問を受け入れる協力者は、地区の自治会、民生委員、地域包括支援センター、社会福祉協議会の協力により募った（表12）。条件は、75才以上で要介護認定を受けておらず（要支援は可）、学生の時間割に他の授業がない水曜午後に学生訪問を受けられること、とした（図11）。

年度初めには80チームが各1名の協力者に割り当てられるが、年度途中あるいは年度の終わりに、諸事情により実習継続を辞退したいとの申し出があった場合には、代替りの協力者をリクルートした（表12）。入院等により一時的に実習を受け入れられない場合には、学生が手紙を書く、病院にお見舞いに行く、などで訪問に代える場合もあった。辞退・中断の理由のほとんどは、協力者またはその家族の健康・介護上の理由であった。

表12 平成27～29年度の年度当初協力者の性別と同居者
平成27年度当初の協力者

| | | 一人暮らし | 夫婦二人暮らし | 子どもと同居 | その他 | 合計 |
|-----|---|-------|---------|--------|-----|----------|
| 野津原 | 男 | 6 | 11 | 7 | 1 | 25(49.0) |
| 地区 | 女 | 10 | 4 | 12 | 0 | 26(51.0) |

| | | | | | | |
|-------------|----------|----------|----------|--------|---------|----------|
| | 合計 | 16 | 15 | 19 | 1 | 51(63.7) |
| 富士見が丘 団地 | 男 | 1 | 9 | 4 | 1 | 15(51.7) |
| | 女 | 8 | 6 | 0 | 0 | 14(48.3) |
| | 合計 | 9 | 15 | 4 | 1 | 29(36.2) |
| 合計 | 25(31.2) | 30(37.5) | 23(28.7) | 2(2.5) | 80(100) | |

※平成 27 年度末までの辞退者は 13 人、主な理由は健康問題。

平成 28 年度当初の協力者

| 地区 | 性別 | 一人暮らし | 夫婦二人暮らし | 子どもと同居 | その他 | 合計 |
|-------------|----------|----------|----------|--------|---------|----------|
| 野津原地区 | 男 | 7 | 9 | 6 | 1 | 23(28.7) |
| | 女 | 8 | 5 | 9 | 1 | 23(28.7) |
| | 合計 | 15 | 14 | 15 | 2 | 46(57.5) |
| 富士見が丘 団地 | 男 | 2 | 8 | 3 | 1 | 14(17.5) |
| | 女 | 12 | 6 | 1 | 1 | 20(25.0) |
| | 合計 | 14 | 14 | 4 | 2 | 34(42.5) |
| 合計 | 29(36.3) | 28(35.0) | 19(23.8) | 4(5.0) | 80(100) | |

※平成 28 年度末までの辞退者は 17 人、主な理由は健康問題。

平成 29 年度当初の協力者

| 地区 | 性別 | 一人暮らし | 夫婦二人暮らし | 子どもと同居 | その他 | 合計 |
|-------------|----------|----------|---------|----------|---------|----------|
| 野津原地区 | 男 | 6 | 8 | 0 | 5 | 19(47.5) |
| | 女 | 11 | 3 | 6 | 1 | 21(52.5) |
| | 合計 | 17 | 11 | 6 | 6 | 40(50.0) |
| 富士見が丘 団地 | 男 | 3 | 7 | 2 | 2 | 14(17.5) |
| | 女 | 15 | 6 | 0 | 5 | 26(25.0) |
| | 合計 | 18 | 13 | 2 | 7 | 40(50.0) |
| 合計 | 35(43.8) | 24(30.0) | 8(10.0) | 13(16.2) | 80(100) | |

※平成 29 年度末までの辞退者は 17 人、主な理由は健康問題。



図 1 1 訪問時の交流

6) 地域交流会（事業報告会）

(1) 平成 27 年度

本事業で学生が得た学びや成果、課題を地域の関係者と共有するため、平成 27 年度には地区ごとに事業報告会を計 14 開催した（表 1 3）。学生は、いずれかの地区の事業報告会に参加することとした。学生チームがそれぞれ 1 年間の学びについて発表し、他の学生や教員とともに、地域の参加者が自由に聞ける形式にした。学生は熱心に準備し、発表した。しかし参加者の中から「匿名とはいえ協力者の健康事情など個人的なことが発表されると、同じ地域の住民として、聞いてよいものだろうかと思うことがある」との指摘があった。

目的：実習での学びを地域住民に報告し、相互に実習の意義への理解を深める。

内容：学生発表（80 チームの学生がそれぞれの協力者への関わりの実際や、学修内容について発表）

身体測定 身長、体重、BMI、体組成、骨密度（一部地区のみ実施）

体力測定 握力、開眼片足立ち

表 1 3 平成 27 年度地域交流会

全 14 回開催

| 日 | 時間 | 場所 | 参加人数 (合計) | 内訳 | | | | |
|----------------------------|-------------------------|----------------|--------------|------------|------------------------|------------------|-----------|--------------------|
| | | | | 地域住民 | | | 大学関係者 | |
| | | | | 協力者 (人) | 協力者以 外の地域 住民 (人) | 関係 機 関 (人) | 学生 (人) | 教職員 (人) (延数) |
| 平成 27 年 11 月 4 日 (水) | 14 時～15 時 | 廻栖公民館 | 41 | 3 | 11 | 0 | 6 | 6 |
| 11 月 4 日 (水) | 14 時～ 15 時 30 分 | 新町公民館 | 40 | 6 | 0 | 0 | 25 | 9 |
| 11 月 11 日 (水) | 14 時～15 時 | 入蔵公民館 | 26 | 1 | 10 | 0 | 11 | 4 |
| 11 月 11 日 (水) | 14 時～15 時 | 福宗二公民館 | 26 | 3 | 10 | 0 | 9 | 4 |
| 11 月 18 日 (水) | 14 時～ 15 時 30 分 | 野津原支所 | 49 | 4 | 6 | 5 | 27 | 7 |
| 11 月 18 日 (水) | 14 時～ 15 時 30 分 | 太田公民館 | 44 | 3 | 18 | 0 | 16 | 7 |
| 11 月 18 日 (水) | 14 時 30 分～ 16 時 | 今市健康増進セ ンター | 44 | 4 | 0 | 0 | 24 | 16 |
| 11 月 25 日 (水) | 13 時 15 分～ 14 時 45 分 | 富士見が丘 公民館 | 57 | 8 | 13 | 2 | 21 | 13 |
| 12 月 9 日 (水) | 14 時～ 15 時 30 分 | 富士見が丘 公民館 | 65 | 7 | 14 | 0 | 32 | 12 |
| 平成 28 年 1 月 13 日 (水) | 14 時～ 15 時 30 分 | 原村ふれあいセ ンター | 55 | 9 | 0 | 2 | 37 | 7 |
| 1 月 20 日 (水) | 15 時～ 16 時 30 分 | 富士見が丘 公民館 | 56 | 5 | 12 | 0 | 30 | 9 |
| 1 月 20 日 (水) | 14 時～ 15 時 30 分 | 原村ふれあいセ ンター | 48 | 6 | 2 | 0 | 30 | 10 |

| | | | | | | | | |
|--------------|----------------|--------------|-----|----|-----|---|-----|-----|
| 1月27日 (水) | 14時～15時 | 竹の内公民館 | 34 | 3 | 7 | 0 | 18 | 6 |
| 1月27日 (水) | 14時～ 15時30分 | 富士見が丘 公民館 | 62 | 7 | 13 | 0 | 30 | 12 |
| 参加者数 (合計) | | | 647 | 69 | 116 | 9 | 331 | 122 |

(2) 平成28～29年度

上記の声をふまえ平成28年度以降は、地域交流会（事業報告会）と呼称を変え、有志学生が参加する健康教室の開催など、地域住民との交流の機会を増やす会へと変更した。学生が主体となり、健康教室及び、その後の地域交流会の企画及び運営を実施した。平成28年度は14回（表14）、平成29年度は10回開催（表15）した。

目的：看護学生が主体となり運営する健康教室をとおして地域住民の健康づくりの機運を高める機会及び、大学と地域住民が交流する機会とする。

実施内容（図12）：

a. 身体測定

身長、体重、BMI、体組成（骨密度※機器の管理の関係上一部地区のみ実施）

b. 体力測定

握力、開眼片足立ち

c. 健康教室

平成28年度：熱中症予防、認知症予防（豆つかみ等）

平成29年度：熱中症予防、認知症予防（制限しりとり等）

基本的な流れ：

| 項目 | 詳細 |
|-----------|----------------|
| 受付 | 調査説明、同意 |
| | 以下をマニュアルに沿って実施 |
| | 1) 問診 |
| | バイタルサインズの測定 |
| 身体測定・体力測定 | 2) 身長 |
| | 3) 体重・体組成 |
| | 4) 握力 |
| | 5) 開眼片足立ち |

| | |
|---------|-------------------------------|
| | 6) 骨密度 |
| アンケート調査 | 比較対照群調査項目の聞き取り |
| 健康教室 | ※平成 27 年度は学生による実習の学びの発表も併せて実施 |
| 粗品贈呈 | |
| 地域交流会 | ※サロン活動への参加、歓談等 |

表 1 4 平成 28 年度地域交流会

平成 28 年度 全 10 回開催

| 日 | 時 | 会場 | 住民参加者 | 大学関係者 | |
|-------------------------|---|-----------------------------------|-------|-------|-----|
| | | | | 学生 | 教職員 |
| 8 月 4 日(木)10:00~11:00 | | ななせ 生きがいクラブ 野津原支所 多目的ホール | 13 | 10 | 9 |
| 8 月 23 日(火)9:00~10:20 | | 原村 ふれあいサロン 原村ふれあい センター | 23 | 14 | 12 |
| 9 月 1 日(木)9:00~10:20 | | 竹の内 ふれあいサロン 竹ノ内公民館 | 19 | 9 | 10 |
| 9 月 2 日(金)9:00~10:45 | | 田島地区 こころの会 田島公民館 | 17 | 9 | 12 |
| 9 月 8 日(木)10:00~11:30 | | N スポいきいき元気 教室 N スポランド | 22 | 9 | 6 |
| 9 月 12 日(月)9:10~11:50 | | わかば老人クラブ 富士見が丘 | 48 | 15 | 10 |
| 9 月 12 日(月) 10:40~11:50 | | 長寿会 公民館 | 8 | | |
| 9 月 13 日(火)9:30~11:00 | | サプナ健康体操グル ープ 野津原支所 大会議室 | 34 | 11 | 10 |
| 9 月 29 日(木)14:00~15:00 | | 上詰ふれあい いきいきサロン 上詰公民館 | 25 | 11 | 8 |
| 10 月 12 日(水)10:00~12:00 | | はつらつサロン 富士見が丘公民館 | 40 | 3 | 8 |
| 10 月 13 日(木)9:00~12:00 | | 新町地区 ふれあいサロン 新町公民館 | 21 | 11 | 9 |
| | | 計 | 270 | 102 | 94 |

表 1 5 平成 29 年度地域交流会

平成 29 年度 全 10 回開催

| 日 | 時 | 会場 | 住民参加者 | 大学関係者 | |
|---------|-------------|--|-------|-------|-----|
| | | | | 学生 | 教職員 |
| 7/25(火) | 10:00~11:30 | ななせ生きがいクラブ サブナ 21 野津原健康体操普及会 (野津原支所多目的ホール) | 27 | 15 | 7 |
| 7/27(木) | 14:00~15:40 | 上詰ふれあいいきいきサロン (上詰公民館) | 18 | 9 | 7 |
| 8/ 2(水) | 9:00~11:30 | 田島地区こころの会 (田島公民館) | 21 | 9 | 6 |
| 8/24(木) | 9:00~11:00 | 竹の内ふれあいサロン (竹の内公民館) | 12 | 7 | 6 |
| 8/28(月) | 9:00~11:00 | 原村ふれあいサロン (原村ふれあいセンター) | 22 | 15 | 7 |
| 8/30(水) | 10:00~11:00 | 長寿会 (富士見が丘公民館) | 14 | 19 | 6 |
| 9/11(月) | 10:00~11:30 | わかば老人クラブ (富士見が丘公民館) | 54 | 10 | 9 |
| 9/13(水) | 10:00~11:30 | はつらつサロン (富士見が丘公民館) | 42 | 12 | 8 |
| 9/20(水) | 9:00~10:30 | 新町地区ふれあいサロン (新町公民館) | 21 | 9 | 7 |
| 9/28(木) | 10:00~11:30 | N スポ野津原いきいき元気教室 (N スポランド) | 20 | 8 | 7 |
| 計 | | | 251 | 113 | 70 |



図12 事業報告会（地域交流会）の様子

（3）イベントでの交流

上記の他、若葉祭（大学祭）や野津原地区の地域イベント（ななせの里まつり）でも学生による健康教室を開催した（図13）。

若葉祭：平成28年5月14～15日、参加者80人、参加学生3人

ななせの里まつり：平成28年11月6日、参加者498人

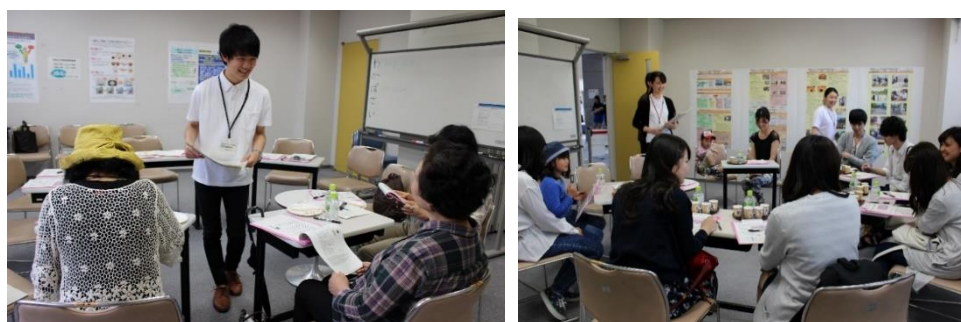


図13 若葉祭の塩分濃度クイズと認知症予防ゲーム

7）協力者の健康問題等への対応

（1）平成27～28年度

学生が協力者や家族の身体的、精神的、社会的な不調等を察知した際には、速やかに担当教員に報告、看護研究交流センター専任教員と情報共有を行い、必要時保健師資格をもつスタッフが個別訪問を行う体制を整備した。また状況に応じて、協力者の同意を得たうえで、事業推進委員である地域包括支援センター職員や民生委員と情報を共有し、事情推進委員が協働して住民（協力者）の健康保持、増進に取り組んだ（図14）。

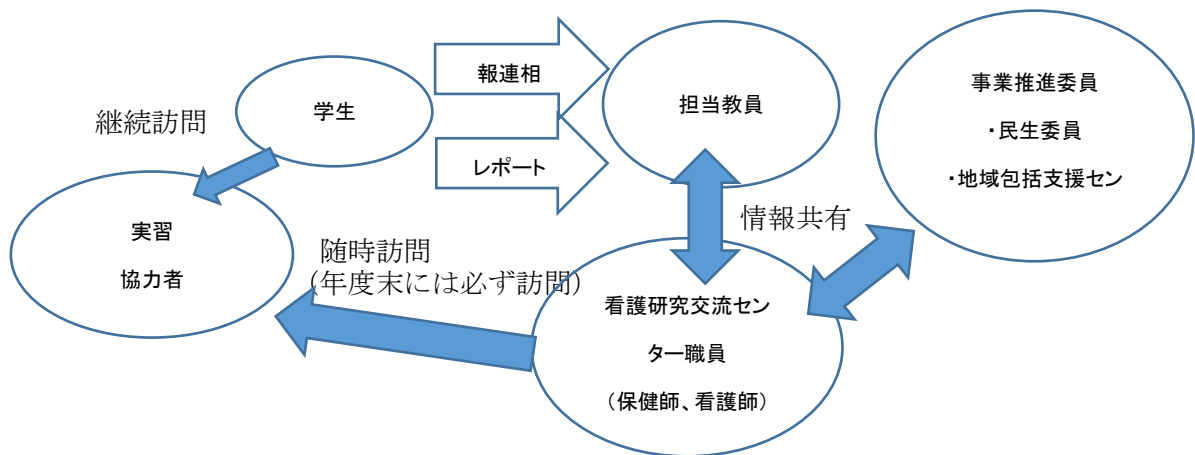


図 1 4 協力者の健康問題等への対応 (1)

【例】協力者のADL（日常生活能力）低下に学生が気づいたことをきっかけに、介護認定の申請準備につなぐことができた。

(2) 平成 29 年度

平成 27 年度、平成 28 年度の体制に加え、緊急時の連絡体制を新たに追加し協力者の有事（救急搬送等を要する状態に至った場合）に備える体制として地域住民の健康保持増進に取り組んだ（図 1 5、1 6）。

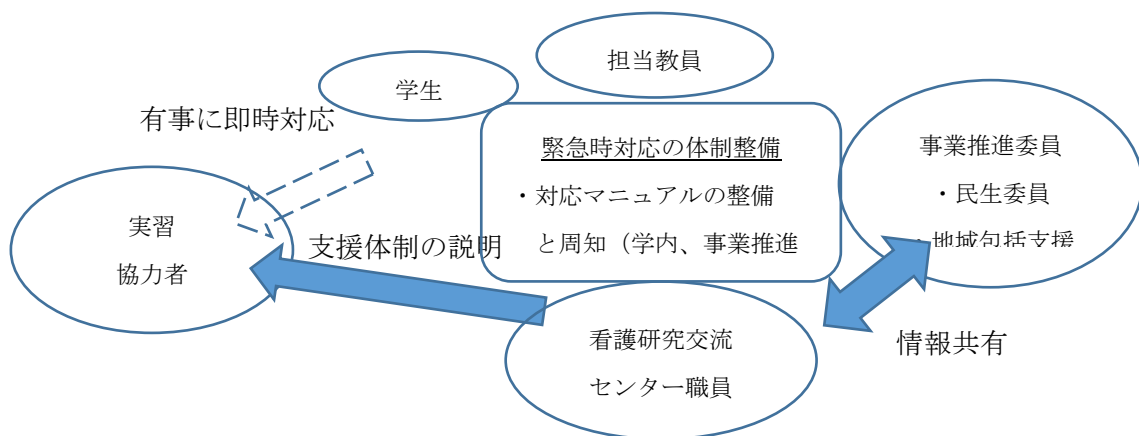
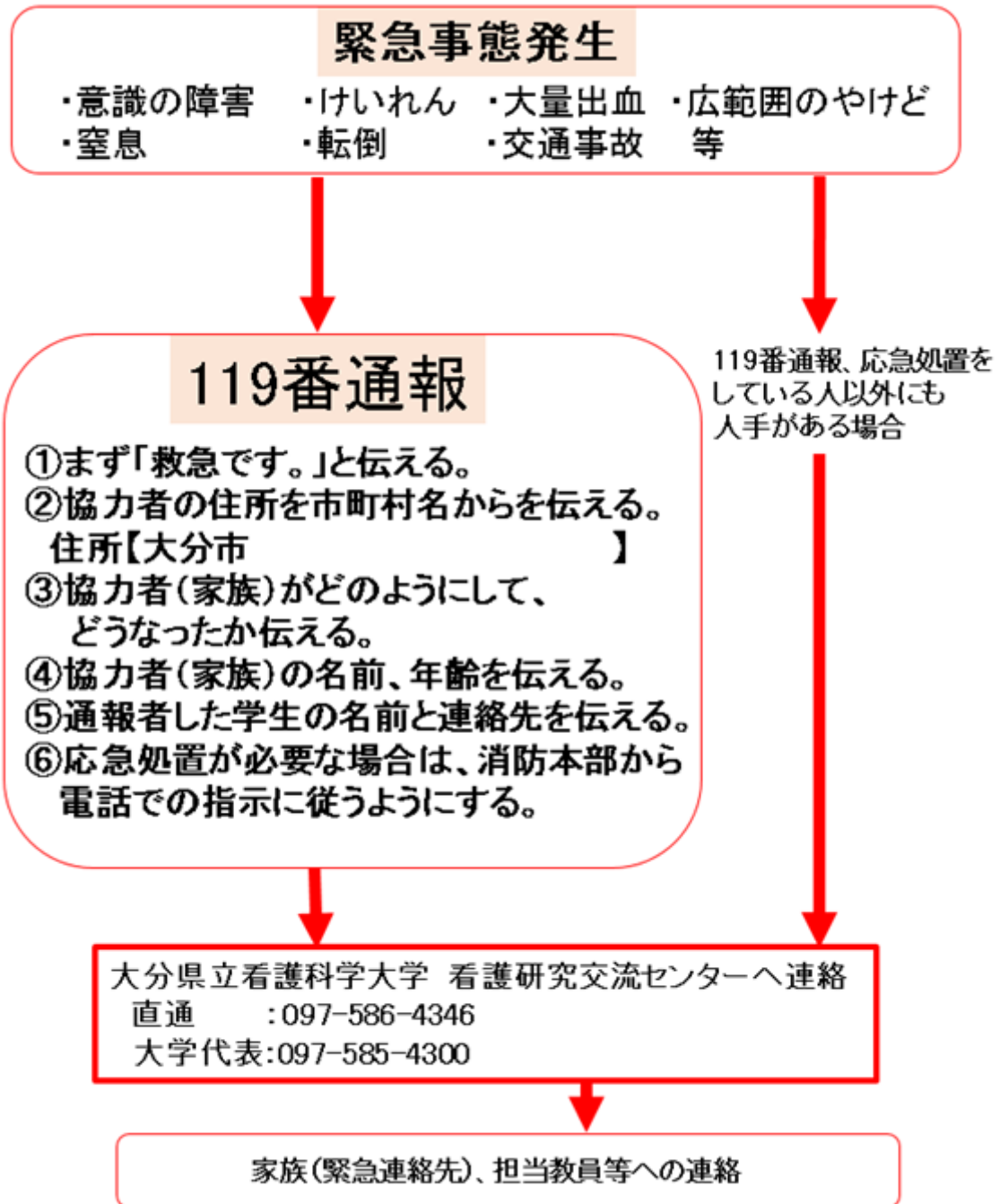


図 1 5 協力者の健康問題等への対応 (2)

【例】独居の高齢者の経年的な体重減少に学生・担当教員が気づいたことをきっかけに、事業推進委員（地域包括支援センター、大分市保健師）と情報共有し、個別訪問実施後、見守り活動が継続となった。

※このマニュアルは訪問靴へ入れておく

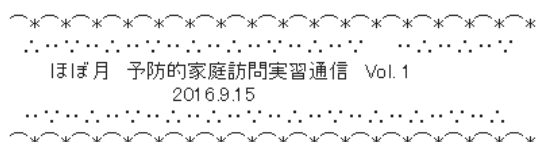


参考資料:消防庁 救急車を上手に使いましょう～救急車が 必要なのはどんなとき?～

図 1 6 訪問時に緊急事態が発生した場合のマニュアル

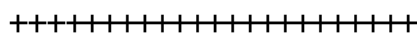
8) 学内メールマガジン

学生同士が自分のチームの動きについて情報共有することはできるが、他チームのことを知る機会は少ない。課外活動や対外発表したチームの情報や、本事業についての対外発表や外部評価に関する情報を、学生と教職員が共有することを目的として、平成28年8月から看護研究交流センターが学内メールマガジンを発信した(図17)。対象は学部生と教職員で、月1回程度配信している。内容は、最近の訪問回数の状況、健康教室のお知らせ、予防的家庭訪問実習に関する番組放映の案内、協力者交代について、チームの支援内容や活動の紹介、などである。



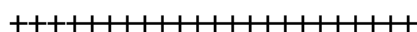
看護研究交流センターです。

今回の通信では、以下の4つについての情報を発信します。



今回の配信内容

- ① 予防的家庭訪問実習 ラジオ放送
- ② 訪問回数・健康チェック調査票
- ③ 学生ボランティアの健康づくり教室開催中
- ④ 協力者様の交代について



① 予防的家庭訪問実習 ラジオ放送
OBSラジオの番組から予防的家庭訪問実習が取材を受けました。取材には、学生を代表して4年次生の矢野亜希さんが収録に参加してくれました。矢野さんが所属する実習チームの担当である、佐藤弥生先生、看護研究交流センターの岩崎りほ先生、そして村嶋学長も収録に参加されました。以下の日程で放送予定です。

番組名:たんねるけん!
日時:9月17日(土)10:40~10:54

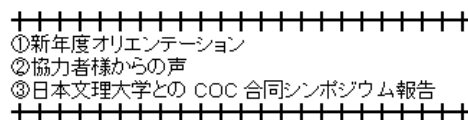
<番組 HP>
http://www.e-obs.com/blog/shirashinken_kotaeruken/
<本学看護研究交流センターHP>
http://www.oita-nhs.ac.jp/np/coc/h28_approach/page_00673.html

② 今後の訪問回数・健康チェック調査票
いよいよ、後学期が始まりました。他の実習や講義などスケジュールを確認し、計画を立て実習に臨んでください。
健康チェック調査票について、チームで進めていますか?1月の最終訪問までに、可能な範囲で情報を得て行きましょう。



看護研究交流センターです。

本年度、最後のメルマガになります。
★4年生の皆さん「国家試験」お疲れ様でした。
★1~3年生の皆さん、1年間お疲れ様!
新しい年度に向けて英気を養う春休みにして下さいね♪
今回の通信では、以下の3つについての情報を発信します。



① 新年度オリエンテーション

来年度は、平成29年度4月12日(水)に行います。概要は以下です。

日時:平成29年4月12日(水)9:00~16:10
場所:講堂・各講義室
内容(予定):

【午前】
・実習についての説明
・地域関係者からのお話
・高齢者の認知機能についてのプチ講義

【午後】
・チームでのディスカッション
・年間計画や実習準備、グループ間での情報共有を予定しています。

※詳細は、新年度開始時に改めてお知らせ致します。

② 協力者様からの声

看護研究交流センターでは、昨年末から2月にかけて皆さんの協力者様宅に、「全戸訪問」をしてきました。以下協力者様の声です。
皆さんの取り組みが、協力者様の健康、そして人生に大きな影響を与えていることが実感できました。

図17 学内メールマガジン

5. 事業の評価

5. 1. プロセス評価

1) 事業推進会議

本事業では、野津原と富士見が丘の両地区で 320 名以上の学生が家庭訪問実習をおこなった。その準備として、地域のステークホルダーと幅広い連携体制を構築することが必要と考えられたことから、事業推進会議の委員として、自治委員連絡協議会・連合自治会、社会福祉協議会、民生児童委員協議会、及び地域包括支援センターに加え、大分県福祉保健部、大分市長寿福祉課・健康課、大分市保健所、大分市市民部、大分郡市医師会、大分県看護協会、及び大分県国民健康保険団体連合会に参加を要請し、事業推進会議の要綱を定めた。これに基づき地域の開業医である医師会代表委員を委員長として、平成 25 年度には会議を 2 回開催（H25 報告書 16-17 頁、延べ参加者 68 名）、平成 26 年度には 3 回開催（H26 報告書 13-15 頁、延べ参加者 112 名）、平成 27 年度には 3 回開催（H27 報告書 13-15 頁、延べ参加者 105 名）、平成 28 年度には 3 回開催（H28 報告書 12-13 頁、延べ参加者 99 人、平成 29 には 3 回開催（延べ参加者 89 名）した（表 8）。

事業推進会議で行われる会議内容はすべて録音し、これを本事業運営に関する評価として事業運営および計画に反映させ、以下の点について取組みの改善を図った。

(1) 本事業の PR 方法：予防的家庭訪問実習のチラシ作成等、本事業に関する PR 方法について評価を受け、地域の高齢者に分かりやすく、関心のもてる内容や方法に改善した。

(2) 予防的家庭訪問実習の協力者をリクルートする方法：家庭訪問を受け入れる実習協力者を募集するにあたり、当初は文書による募集を予定していたが、関係者の「地域の高齢者が集うサロン等の場に赴き、直接依頼したほうが協力を得やすい」等の意見に基づき、募集方法を改善して本事業に必要な多数の高齢者から協力を得ることができた。

(3) 対照群調査の対象者選定方法：健康等の経年変化を協力者と比較する目的で対照群調査を行うにあたり、当初は回覧板で募集する等の案があったが、「対照群も高齢者で依頼したほうが協力を得やすい」等の意見に基づき、サロン参加者から多数の対照群を得ることができた。

2) 事業推進会議幹事会

事業推進会議で事業方針をオーソライズするための事前の準備・調整作業のため、同会議の幹事会についても要綱を定め、年 3 回開催した（表 8）。幹事会

では主に行政関係者や地域包括支援センターから、本事業に関する提案・助言・情報提供等の支援を受けた。

3) 地域連絡会議

野津原地区および富士見が丘地区それぞれの自治委員連絡協議会・連合自治会とも事前打ち合わせとして、平成 25 年は地域連絡会議を両地区合わせて年 4 回開催（延べ参加者数は 16 名）、平成 26 年は両地区合わせて年 5 回開催した（延べ参加人数 30 名）。また、平成 27 年、平成 28 年、平成 29 年は年 3 回開催（延べ参加者はそれぞれ、34 人、37 人、35 人）した。これらを通して自治会・民生委員から提案・助言・情報提供等の支援を受けた（表 8）。

4) 学内の取り組み体制

平成 25～26 年度にカリキュラム改定準備作業を行い、平成 27 年度入学生から看護学部カリキュラムを改定し、予防的家庭訪問実習を 1～4 年生の全学年で必修科目（各学年 1 単位：計 4 単位）と位置づけた。これに合わせ、全学年の科目や年間スケジュール等を調整・変更した。ただし、平成 26 年度までの入学生には旧カリキュラムが適用されるので、平成 27 年度の 2～4 年生についてはカリキュラム移行期間の対応として、旧カリキュラムにおける既存実習等に本実習を充てることにした。

実習の進め方については、平成 25～26 年度の試行を通して順次検討し、予防的家庭訪問プロジェクト（平成 26 年度には 12 人の教員と、事務職員）が中心となって平成 26 年度末までに、試行結果の振り返りを反映した学生用の実習要綱を編集した。従来から本学では学年縦割りの課外グループ（コンタクトグループ）を編成してきたので、これを改編して本実習の学生グループを組織することとし、学生生活支援委員会等の教員がタスクグループを組織して作業にあたった。各グループに複数の担当教員を割り当て、教員の専門にかかわらず全教員が複数の学生グループを担当する体制を構築した。各学年の単位認定研究室を決定し、合同会議を 2 回開催して単位認定方法について協議した。

学生の実習記録を電子媒体で提出させることで、同じチームの学生や担当教員が情報を共有しやすい環境を整え、セキュリティに配慮して外部からアクセスできない専用サーバーを整備した。

年度末を中心に、学生と教員から本実習の評価を聴き取り、次の年度の計画に反映した。以下はその例である。

- ・地域高齢者の自宅を初めて訪問する学生には不安や緊張が強いことが試行段階で明らかになったので、実習オリエンテーションにマナー指導やロールプレイ等を取り入れた。

- ・学年の異なる学生が同じグループで実習を行うので、全体の実習目標に加え、学年別の実習目標を設定した。
- ・教員が学生と共に訪問する場合や、学生のみで訪問する場合等の、訪問前後の報告、カンファレンス、記録等の指導について、教員の意見を反映させて教員用実習要項を改善した。
- ・平成 27 年度は野津原地区の遠隔地（公共交通が不便）を訪問する場合にタクシーチケットを提供していたが、野津原では比較的近い地区でも公共交通が不便であること、女子学生のみが徒歩で夕方帰校するのは危険があることから、同地区では距離にかかわらずタクシー使用を認めることとした。

5) 地域住民の参加

事業推進委員である連合自治会長の方が自発的に、学生の訪問の様子や地域交流会の様子を記録したDVDを作成した（平成 28、29 年度）。これは、協力者と学生チームの同意の下、撮影者が家庭訪問に同行して撮影したものである。本事業のアドバイザーであるコロラド大学名誉教授 Magilvy 博士らへの情報提供を考えて、日本語版と英語版を作成した。

年度初めの学生オリエンテーションや、後述の対外シンポジウムの機会に、自治会長や協力者の出席を得て、学生や一般市民に対して本実習の経験や意義を語ってもらうことができた。

6) 小括

以上のように、本事業では地域のさまざまなステークホルダーと共に協議する機会を組織的に構築したことが、住民の理解を得て事業を円滑に進めることに役立った。また、事業の中核は予防的家庭訪問実習プロジェクトと看護研究交流センターが担ったが、多数の教員がさまざまな角度から本事業に参画し、ことに担当教員としては全員が本実習に関わることとなり、同時に教育改革としてのカリキュラム改定も実現した。地域住民からも、本事業への積極的な関与を得た。

5. 2. アウトプット評価

既に述べたように、本実習を本格実施するまで、および本格実施を開始してからも、地域との事業推進会議・同幹事会・地域連絡会議を定期的で開催し（表 8）、他方学内でもさまざまな検討会を繰り返し開催して、事業の方向性を検討してきた。そして本実習の展開方法を定めるために、平成 25 年度には学生 2 グループによるテスト訪問を行い、平成 26 年度にはカリキュラムの自由科目として位置づけ学生 33 名 8 グループによる試行訪問を行って、段階的に検討を進めた。

平成 27 年度からはカリキュラムを改定し、全学年必修科目として全学生 80 チームで実習を開始した。

本実習に参加した 80 チームの学生数は、平成 27 年度 333 人、平成 28 年度 331 人、平成 29 年度は 340 人であり、ほぼすべての教員（学長と産休・育休等の教員を除く）が 80 チームを担当した（表）。延べ訪問回数は、平成 25 年度 2 回、平成 26 年度 31 回、平成 27 年度 400 回、平成 28 年度 501 回、平成 29 年度は 511 回であった（表 1 6）。すなわち当初の予定通りに本実習の展開が始まり、小さな単科大学のほぼ全体が本事業に参加した。

平成 26～27 年度は、年度末に両地区で事業報告会を開催し、グループ毎に学んだことや見出した地域の課題について発表を行って、地域への成果還元を試みた。平成 27 年度からは開催形式を変え、健康教室や健康チェックなどによる地域交流会を開催した。平成 27 年度は 13 回（延べ参加者数 183 人）、平成 28 年度と平成 29 年度は各 10 回（延べ参加者数は 270 人と 251 人）であった。ただし、平成 27 年度の事業報告会には全学生が参加したが、平成 28～29 年度の地域交流会では一部学生が繰り返し参加したにとどまった。

表 1 6 学生の訪問回数と事業報告会（地域交流会）参加者数

| 年度 | 学生数 ^{*1} | 教員数 ^{*1} | 実習協力者数 (訪問回数*協力者数) | 事業報告会/地域交流会 延べ参加者 |
|----|-------------------|-------------------|--|----------------------|
| 25 | 4人 | 3人 | 2人(2回*2人) | 野津原 9人 富士見 20人 |
| 26 | 33人 | 8人 | 8人(2回*1人,3回*1人,4回*4人,5回*2人) | 野津原 36人 富士見 87人 |
| 27 | 333人 | 58人 | 80人(3回*1人,4回*22人,5回*34人,6回*22人,7回*1人) | 野津原 106人 富士見 77人 |
| 28 | 337人 | 59人 | 80人(3回*1人,4回*22人,5回*34人,6回*22人,7回*1人) | 野津原 157人 富士見 96人 |
| 29 | 340人 | 60人 | 80人(4回*1人,5回*9人,6回*46人,7回*18人,8回*4人,9回*2人) | 野津原 120人 富士見 110人 |

^{*1} 学生、教員数は各年度 4 月 1 日付

社会貢献の面では、平成 28～29 年度は地域交流会（上表）において、有志学生による健康教室と健康チェックを実施した。また、当初からの予定ではなかつ

たが、同じくCOC事業が採択された日本文理大学（大分市）と共催のシンポジウムを、2回開催することができた。

5. 3. アウトカム評価

1) 学生の学修

(1) 実習記録の分析から

平成27年度から本格的実施となった予防的家庭訪問実習を履修した333人の最終レポート（平成27年度最終レポート）を質的に分析し、「学生の学び」を分析したところ、少なくとも以下のことを学修していることが整理された。

- ・高齢者が、健康で生き生きとした生活をしていること
- ・病棟では無く、地域で暮らす高齢者の日常生活に焦点をあてる必要性
- ・地域在住の高齢者の健康生活を知ることの重要性
- ・地域について学ぶ事の重要性
- ・地域に住む人の課題
- ・積極的に保健行動に関わることが、個人だけでなく地域にとって重要
- ・患者は、地域に暮らす住民ということの理解
- ・健康問題を予防する介入行動の重要性
- ・個人の強みに焦点を当てることの大切さ
- ・チームワーク（対人関係を構築する）の重要性
- ・チームワーク（医療チームの一員としてのチームワーク）の必要性

(2) 学生アンケートから

学生の本実習に対する感想や意見を収集する目的で、事業最終年度にアンケート調査を行った。メールと紙媒体で平成29年12月12日に全学生に宛てて質問紙を配布し、12月22日までに98人（28.6%）から回答を得た（表17）。回答率が低いので結果は慎重に解釈すべきだが、概要を以下に記す。

表17 回答者の属性

| 回答者の属性 | 項目 | 人 (%) |
|----------------|------|----------|
| 学年 n=98 | 1年次生 | 22(22.4) |
| | 2年次生 | 14(14.3) |
| | 3年次生 | 37(37.8) |
| | 4年次生 | 25(25.5) |
| 協力者の交代 n=94 | あり | 23(24.5) |
| | なし | 71(75.5) |

| | | |
|----------|-------|-----------|
| 主に訪問した地域 | 野津原地区 | 45 (50.6) |
| n=89 | 富士見が丘 | 44 (49.4) |

学生が学べた内容（図18）としては、「高齢者とのコミュニケーション」が一番多く、次いで「高齢者の生活」、「個人の健康・強みに目を向ける必要性」などを、半数以上の回答者が学べていたことが分かった。

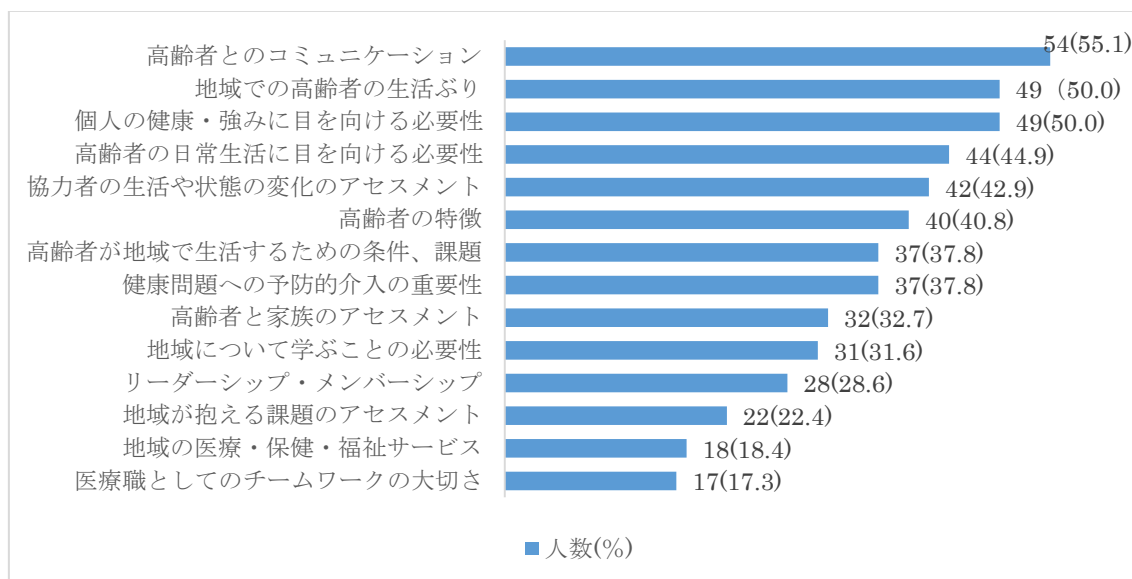


図18 学生が学べた内容

回答の抜粋を以下に示す（表18）自主性・主体性の成長を自覚している学生は4割を超えた。実習の目的や目標、チーム構成、実習評価項目、カンファレンスについては、適切とする回答が比較的多かった。ただし訪問前後のカンファレンスについては、3割以上の学生が概ね「効果的ではない」と感じていた。訪問回数については、約7割が規定回数（4回）を「多い、割と多い」と回答した。

表18 学生アンケートの回答

| 質問項目 | 選択肢 | 人(%) |
|---------------------------|----------------|----------|
| 自主性・主体性は育ったと思いますか n=98 | 思う・まあまあ思う | 45(46.0) |
| | どちらでもない | 39(39.8) |
| | あまり思わない・思わない | 14(14.3) |
| 実習目的は適切でしたか n=98 | 適切・まあまあ適切 | 44(44.9) |
| | どちらでもない | 39(39.8) |
| | あまり適切でない・適切でない | 15(15.3) |

| | | |
|--|----------------|----------|
| 実習目標は適切でしたか n=98 | 適切・まあまあ適切 | 42(42.9) |
| | どちらでもない | 33(33.7) |
| | あまり適切でない・適切でない | 17(17.4) |
| 1～4年生というチーム構成は 適切でしたか n=98 | 適切・まあまあ適切 | 47(47.9) |
| | どちらでもない | 33(33.7) |
| | あまり適切でない・適切でない | 18(18.4) |
| あなたのチーム構成は 適切でしたか n=97 | 適切・まあまあ適切 | 45(46.4) |
| | どちらでもない | 40(41.2) |
| | あまり適切でない・適切でない | 12(12.4) |
| 協力者とかかわる回数（年間4回）は適切 だったと思いますか n=97 | 多い・わりと多い | 72(84.3) |
| | ちょうど良い | 21(21.6) |
| | わりと少ない・少ない | 4(4.1) |
| カンファレンス（事前・事後）は役に立ちま したか n=95 | 役立った・まあまあ役立った | 32(33.7) |
| | どちらでもない | 28(29.5) |
| | あまり役立たない・役立たない | 35(36.8) |
| 実習の評価項目は適切でしたか n=97 | 適切・まあまあ適切 | 40(41.3) |
| | どちらでもない | 31(32.0) |
| | あまり適切でない・適切でない | 26(26.8) |
| 担当教員の指導体制は 適切でしたか n=96 | 適切・まあまあ適切 | 45(45.9) |
| | どちらでもない | 35(35.7) |
| | あまり適切でない・適切でない | 16(16.3) |
| 看護研究交流センターの指導は 適切でしたか n=96 | 適切・まあまあ適切 | 44(45.1) |
| | どちらでもない | 39(39.8) |
| | あまり適切でない・適切でない | 3(3.0) |
| 実習環境は全体として 適切でしたか n=95 | 適切・まあまあ適切 | 37(37.7) |
| | どちらでもない | 27(27.6) |
| | あまり適切でない・適切でない | 31(31.6) |

質問毎に無回答を除いて集計したので質問により n は異なる。

（3）学生の発表内容から

本学の学生は、日本文理大学とのCOC成果発表会/合同シンポジウム（平成27、28年度の2回）及び、平成29年の日本地域看護学会学術集会において、予防的家庭訪問実習での発表において、以下の学修や今後の学修上の課題を見出した。

【学修内容】

- ①高齢者とのコミュニケーションの重要性
 - ・認知機能の維持に役立つ
 - ・会話により人生が楽しくなることを知ることができた
- ②協力者の健康管理の必要性
 - ・協力者の強み、家族の強みを生かした関わりが重要
- ③生活の場を訪問し実際の環境を知る大切さ
 - ・生活背景を知り、楽しみを尊重した関わりが大切
- ④人としての関わりは心の安定につながる
 - ・家族、近所付き合いやその交流
 - ・協力者にとっての安らぎの場所や、人の存在を大切にする
- ⑤生活上の” ささやかな ” 疑問・悩みに気づくことの重要性
 - ・ゴミ捨て場の位置やそれまでの経路など
 - ・普通の人々が普段出来ていることが、出来ないことにはいかに気づくことが出来るか
- ⑥高齢者自身が地域の集まりの情報を得る難しい存在であること
 - ・インターネットや、スマートフォンを活用できる環境にない人もいる

【今後の学修上の課題】

- ①測定技術の熟達
 - ・握力測定を継続し、握力の維持・増進
 - ・血圧の確認を継続
- ②コミュニケーション技術の向上
 - ・楽しいコミュニケーションで楽しい時間を共有
- ③協力者さんのできること「強み」を活かす方策の検討
 - ・趣味や今までの生活様式、信念などを会話などから把握する
 - ・協力者さんの趣味や楽しみを大切に
- ④地域で暮らす人々が健康の維持・増進のために行っている地域活動について
 - ・サロン活動や、ボランティア活動など健康に繋がる活動について知る
- ⑤地区の特性を踏まえた住民への関わり
 - ・地区の特徴や、その地区で暮らす人の特性について知り、強みを生かした健康管理、指導につなげる必要性

以上のように、学生が地域に目を向けるようになったこと、高齢者を一生活者としてとらえつつあること、生活環境や地域社会にも目を向けていること、自分

たちの視野が訪問を重ねる中で広がったことを自覚していること、などがうかがえた。これらは、本事業の目標に沿った方向での変化だと考えられる。ただし、本実習の進め方については、さらに改善の余地があることも示唆される。

2) 協力者への効果

(1) 聴き取り調査

協力者に対しては年度末に、担当教員や看護研究交流センター教職員が訪問して、謝意を表するとともに感想や意見の聴き取りを行い、合わせて次年度の協力の可否を確認した。この際の聴き取り内容の一部を抜粋し、以下に示す。

(ア) 平成 25 年度 (2 人)

- ・若い人が来ると、孫がくるような感じで嬉しい。
- ・戦時中の話など昔話になるが、若い子が知らない話もしてあげたい。貴重な話になると思う。今まで、そういう機会がなかった。
- ・2~3か月に1回の訪問のペースでいいと思う。年寄りには楽しみに待つと思う。
- ・高齢者は体が不自由になるから、その不自由な面を補う介護用品などの情報提供をすると喜ぶと思う。
- ・今回は40分くらいだったから、十分に話ができなかった。1時間はあったらいいと思う。
- ・学生が高齢者から聞きたい情報や学びたいことなどテーマを決めて質問してもらえるとこちらも話しやすい。

(イ) 平成 26 年度 (8 人)

- ・若い人と会話して笑うことが増えてよかった。
- ・ノートに書き綴っている面白い話を聞いてくれる人ができてよかった。
- ・学生に同郷の人がいて話が合う。嬉しい。
- ・息子がとにかく喜んでくれている。
- ・若い子が来てくれるのは嬉しい。
- ・和やかに話ができるだけでもいい。
- ・人が訪ねてくれることはよいこと。こっちも助かっている。
- ・若い人との交流は必要な事なので、この実習はとてもよい。
- ・若い人に聞かせたいことが多いので、来てくれるのは嬉しい。
- ・4年生が立派。下級生の見本となっている。

(ウ) 平成 27 年度 (75 人)

①健康への意識の高まりを感じる

- ・より健康について意識するようになった。
- ・学生が来るので健康維持ができています。
- ・認知症予防のことを教えてくれるので、実践するようにしている。
- ・今日が何月何日か意識するようになった。
- ・学生の話すことによって、昔の記憶がよみがえり、「あの頃あんなに頑張っていたんだから、頑張ろう！」

と元気がわく。

②楽しみや安心を感じる

- ・子どもが帰って来るような楽しい気持ちになる。
- ・若い人と話すとき明るくなる。
- ・学生が来ると夫婦の会話も弾む。
- ・笑顔が何より嬉しい。
- ・学生の訪問実習を高齢者の一人暮らしで、不安が多かったが、気持ちが安らいだ。

③世代間の交流が来ている

- ・若い人たちが富士見が丘団地に来ていると思うと、それだけで活気がでます。
- ・看護師の卵である学生が医療の知識を地域の人に教えたりすると、さらに深い関係づくりができるのではないかと思った。
- ・熱心な生徒が訪問に来てくれて、孫みたいにいる。
- ・若い世代の人のことを考えるようになり、子供や孫への接し方が変わった。

(エ) 平成 28 年度 (76 人)

①健康への関心の保持、増進

- ・学生が運動や健康についてパンフレットを持ってきてくれるので健康への関心が高まり、参考になっている。
- ・毎日学生に教えてもらった体操をしている。
- ・血圧測定・記録ををはじめ、昨年に比べて血圧が安定している。
- ・運動が苦手だったが、学生と一緒にウォーキングをするようになった。
- ・塩分濃度を測定してもらい、減塩を心がけるようになった。減塩を心がけるようになり、外食も減り、降圧薬の内服量も減った。

②楽しみに感じている

- ・楽しみが増えた。学生が来ると思うとわくわくする。
- ・学生が来た時の方が体の調子がよい。
- ・2年目となり慣れてきたが、学生はきちんと緊張感を持って接してくれ、とても楽しく感心している。

(オ) 平成 29 年度 (79 人)

①学生実習を楽しみにしている

- ・学生が訪問に来るようになり4年となるが、毎回、夫婦で楽しみにしている。
- ・訪問を楽しみにしている。
- ・訪問時も話題が途切れることなく、有意義に過ごしているとのこと。
- ・学生との会話は楽しく、訪問は楽しみにしてくれているよう。
- ・1人暮らしで、人と話をする機会も減り、最近朝から晩まで一度も話さなかった日があると。誰も訪ねてこない寂しいので、学生の訪問がとても嬉しい、毎回楽しみに待っている。
- ・「来年度も来てもらえるのか？」という質問もあり、学生の訪問をとても楽しみにしている。

②生活に張りが出る

- ・誰か来るとなるとちゃんとしようと思う
- ・学生さんがくるから片付けよう、という気持ちになれる
- ・生活にメリハリがつく
- ・人を迎えようとする気持ちになれるのがよい
- ・おもてなしをするために事前に計画をたて、実践しているようで、学生の訪問自体がよい刺激となっている。(注：協力者には学生のもてなしをしないよう依頼しているが、実際にはもてなしを受けることもあり、状況によっては辞退せず受けることもある。)
- ・学生におもてなしをすることが生きがいとなり、生活にハリがでている。

③実習継続に関する希望

- ・ぜひ実習を続けてもらいたい
- ・学生が来ることでとても楽しく、待ち遠しい、よければ実習を続けてもらいたい
- ・もちろん学生のお役に立てるのであれば続けます。

(2) 協力辞退者の背景

本実習を全学で本格実施するようになり、毎年度初めに 80 人の在宅高齢者に協力を依頼するようになった結果、毎年 2 割程度が翌年度の協力を辞退することがわかった。理由の多くは、協力者自身または家族の健康・介護の事情であった。辞退者の多くは 80 歳代後半であった。本実習の狙いとしては、同一協力者にできるだけ長く協力を続けてもらえることが望ましいので、上の結果をふまえ、平成 30 年度からは新規協力者の年齢条件を“70 才以上”に引き下げる方針を決めた。

(3) 対照群との比較調査

本事業では当初から、協力者が実習学生の訪問を受け続けることが、その生活や健康にどのような及ぼす影響を検討するために、同じ地区で対照群と比較することを検討した。長い目で見れば、高齢者の体力や健康水準が低下することは避けられないので、予防的家庭訪問実習によって低下を遅らせることが可能かどうか、という点に着目した。どのような対照群を設定し、どのような方法でどのような情報を収集比較するかを、事業推進会議等で慎重に検討した結果、以下の方法を採用した。

協力者：平成 27～29 年度の間、学生が訪問する機会、または年度末に大学教職員が訪問する機会に、聴き取り、観察、測定等を行い、別記の情報を収集する。

対照群：同じ地区で在宅生活をしながら、高齢者サロンに通う 75 歳以上の高齢者で、この調査研究への協力を同意した人を対象とし、前記の事業報告会（地域交流会）の機会に健康調査を実施して、同様の情報を収

集する。

このサロンとは、市社会福祉協議会が組織しているものである。実は協力者の大半はサロンにも通っているので、サロンに属する協力者群を対照群と比較すれば、「予防的家庭訪問実習+サロン」と「サロン」の効果を比較することになる。

収集データ：

① 問診 49 項目

- ・ 個人属性 (3 項目)
- ・ 厚生労働省基本チェックリスト (25 項目)
- ・ ソーシャルサポート (10 項目)
- ・ 睡眠 (2 項目)
- ・ 外出・活動 (2 項目)
- ・ 健康状態 (受診・入院・介護認定等) (6 項目)
- ・ 健康に関する関心 (11 項目、平成 28～29 年度のみ)

② 身体測定 (身長、体重、血圧、脈拍)

③ 体力測定 (握力、開眼片足立ち)

平成 27～29 年度の 3 年続けてデータを収集できた、協力者群 51 人と、対照群 78 人の、計 129 人を検討した。2 つの群の調査開始時点 (平成 27 年度) のデータを比べると (表 1 9)、対照群には女性が多く (82%)、そのためか握力が低く、肥満度 (BMI) や血圧でもいくらか差がみられた。

平成 28 年のデータを両群で比べると、「最近健康への関心が高まった」という回答が、協力者群では 42%と、対照群の 18%より有意に多かった (表 2 0)。平成 29 年の調査でも同様であり、協力者群の健康の関心は保持されていることがわかった。

ただし、生活機能の各項目で「平成 27 年に要支援でなかった人」のうち「平成 29 年 (2 年後) に要支援となった人」の割合を算出したところ、多くの項目で両群に差は見られなかった (表 2 1)。運動機能ではむしろ、「要支援となった人」の割合が協力者群で 15%と、対照群の 3%より有意に高かった。これは、平成 29 年度に複数の協力者が、骨折等により入院したことによると考えられた。

| | | | | | | | | | |
|-----------------------------------|-----------|-----------|-------|-----------|-----------|------|-----------|-----------|------|
| 運動機能 訪問群 (N=50) 対照群 (N=78) | 1.4(1.2) | 1.4(1.2) | NS | 1.4(1.2) | 1.4(1.3) | NS | 1.9(1.3) | 1.4(1.2) | .030 |
| 口腔機能 訪問群 (N=49) 対照群 (N=78) | 0.6(0.7) | 0.6(0.8) | NS | 0.6(0.8) | 0.7(0.8) | NS | 0.7(0.7) | 0.5(0.7) | NS |
| 認知機能 訪問群 (N=48) 対照群 (N=78) | 0.5(0.6) | 0.4(0.6) | NS | 0.5(0.7) | 0.5(0.7) | NS | 0.5(0.7) | 0.5(0.7) | NS |
| 閉じこもり 訪問群 (N=50) 対照群 (N=78) | 0.2(0.4) | 0.2(0.4) | NS | 0.2(0.4) | 0.2(0.5) | NS | 0.3(0.4) | 0.3(0.5) | NS |
| うつ状態 訪問群 (N=50) 対照群 (N=78) | 0.3(0.7) | 0.9(1.3) | <.001 | 0.3(0.7) | 0.9(1.4) | .003 | 0.7(1.2) | 0.9(1.2) | NS |

表 2 0 健康への関心の高まりの比較

| 平成 28 年 | | | |
|----------|-----------|-----------|----------------------|
| | 協力者群 | 対照群 | 群間差 |
| 高まった | 20(41.7%) | 14(17.9%) | P=.004 ¹⁾ |
| 不変/低くなった | 31(58.3%) | 64(82.1%) | |

¹⁾フィッシャーの直接確率法による比較で有意差あり

表 2 1 生活機能の低下割合の比較

生活機能の各項目で「平成 27 年に要支援でなかった人」の中で「平成 29 年に要支援となった人」の割合を男女別に求めた。

| 平成 27 年 要支援非該当者 (協力者:対照群) | 平成 29 年の要支援者 | | | 群間差 ¹⁾ |
|---------------------------|--------------|-----------|-----------|-------------------|
| | 協力者群 | 対照群 | | |
| 認知機能 (n=27:49) | 男 (n=16: 7) | 0 (0 %) | 0 (0 %) | - |
| | 女 (n=11:42) | 1 (3.7%) | 2 (4.1%) | NS |
| 口腔機能 (n=43:65) | 男 (n=24:11) | 1 (4.2%) | 0 (0.0%) | - |
| | 女 (n=19:54) | 1 (5.3%) | 3 (5.6%) | NS |
| 運動機能 (n=40:64) | 男 (n=22:12) | 4 (18.2%) | 2 (16.7%) | NS |
| | 女 (n=18:52) | 2 (11.1%) | 0 (0.0%) | - |
| 閉じこもり (n=51:61) | 男 (n=26:11) | 1 (1.9%) | 1 (1.6%) | NS |
| | 女 (n=25:50) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | - |
| うつ状態 (n=45:55) | 男 (n=25: 9) | 4 (16.0%) | 0 (0.0%) | - |
| | 女 (n=20:46) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | - |

¹⁾フィッシャーの直接確率法による比較で有意差なし

(4) 課外活動事例

予防的家庭訪問実習のフィールドは「協力者の自宅」と想定して実習を進めていたが、本実習を続けるうちに、協力者の余暇活動に同行する学生や、社会活動に共に参加する学生が現れた（図19）。これは、当初予定していた実習環境の枠を、良い意味で超えた活動であり、学生が高齢者の暮らしを広くとらええなおす契機となった。

平成28年度：

- ・ 自宅周辺の散歩、ウォーキングに同行（複数チーム）
- ・ 協力者の余暇活動（釣り）に参加（1チーム）
- ・ 協力者のボランティア活動（地区公民館で）に同行（1チーム）

平成29年度：

- ・ 自宅周辺の散歩、ウォーキングに同行（複数チーム）
- ・ 協力者のボランティア活動（地区公民館で）に同行（1チーム）
- ・ 協力者と共に地域の餅まきに参加（1チーム）



図19 課外活動の事例

3) 社会への還元

(1) 学生の記録から地域へ

平成29年度は340人の学生が、予防的家庭訪問実習に参加した。この年度は、学生の観察や気づきを地域へ還元することを意図して、学生の年度末最終レポートに「協力者の方が生活する地域について、考えたことや感じたことがあれば自由に記述してください」という項目を追加した。その記載内容を以下に要約する。

①地域で暮らす高齢者を取り巻く問題

ア) 地形と移動手段

<富士見が丘団地>

- ・急な坂道があるので、荷物を持って歩くときには対象者にとっては負担となると思った。
- ・協力者が住む地域には坂が多い。坂が多い事で運動になるというメリットもあるが、足・腰に負担がかかるなどデメリットになることも多いと感じた。
- ・協力者が生活する地域は、地面に凹凸が多いことや坂も多いことに加え、車道と歩道との段差が大きいため、歩行中に転倒するリスクが高いと考えられる。

<野津原地区>

- ・協力者にとって住み慣れた環境ではあるが、協力者は押し車を押すのでところどころ舗装されていないでこぼこした道があるため歩行するのに危険であると感じる。
- ・歩行できなくなると独居での生活が近くに店がないため、買い物に徒歩で行くとき、雨天時やがけ崩れなどが生じている場所ではとても危険であると感じた。厳しくなると感じる。
- ・買い物を行える場所も距離があり、交通の便も悪い。
- ・病院や買い物といったような、生活に必要不可欠な物事にアクセスすることが簡単ではない地域に住んでいるので、生きていくうえで様々な障害がありそうだなと思った。

イ) 若者・若い世代の不足

- ・周辺住民に若い方がいないためその点で不安を感じる。
- ・若い世代が離れてしまうことで高齢化率が高くなっていると考え。地域のつながりを重要視しなくなった現代、特に若い世代において、郊外の地域を健康にする方法を大学院で深く学んでいきたい。

②地域で暮らす高齢者の特徴

ア) 健康への意識の高さ

- ・富士見ヶ丘団地の方々には朝・夕に犬の散歩やウォーキングを行っている高齢者の方が多く（健康への）意識が非常に高いと感じた。
- ・協力者が参加している会は、健康の維持・増進を目的とした地域活動であることに加えて、地域の人と歩くことより交流の機会が増えると考えられる。

イ) 地域住民同士の交流

- ・協力者さんは地域のかたと多く交流があり一緒に出掛けたり、電話をしたりと交流があり盛んである。
- ・とても趣味が多く、活発的な方であるため地域の方との交流は盛んであると感じた。

- ・他の地域と比較して近隣住民とのつながりが強く、協力者さんも地域での集まりに積極的に参加しており、地域住民同士が頻りに顔を合わせながら、支え合いながら生活している。
- ・ご近所同士の交流が盛んであること、サロンなどで出かけることが多いことは地域の利点と考えられる。

(2) 健康教室

平成 27 年度 13 回、平成 28 年度 10 回、平成 29 年度 10 回の健康教室を開催した（延べ参加者数は、それぞれ 183 人、253 人、230 人）。内容は、認知症予防、熱中症予防などであった（表、図）。

(3) 地域課題を保健師と情報共有した事例

① 地域課題の抽出と情報共有

看護研究交流センター教職員による協力者訪問時に、実習の話題に限定せず、「地域に暮らす上で困ること」について聴き取りを行った。本事業の対象者は基本的に「健康な高齢者」なので、困ることの抽出は困難であろうと予想していたが、約 3 割から「交通手段が困る」という声が聞かれた。

- ・バス通りまでが遠い（2 地区共通）
- ・運転免許を返納したらバス停に行く手段がなくなるから困る（2 地区共通）
- ・坂が多いので徒歩でも外出しにくくなる（富士見が丘団地）。
- ・市がバス停に駐車場を設けてくれているが、そこまでいく交通手段がないし、免許を持っている人も、返納をした場合最終的には困る（野津原地区）

② 市保健師との情報共有

学生訪問の中で明らかになった協力者の健康課題については、個人情報に関する情報が多いため、慎重な取り扱いを行う必要があった。そのような中、協力者の同意を得たうえで保健師等と情報共有し、協力者の健康の保持増進につなげることが出来た事例として、次のようなものがあった。

【平成 28 年度】

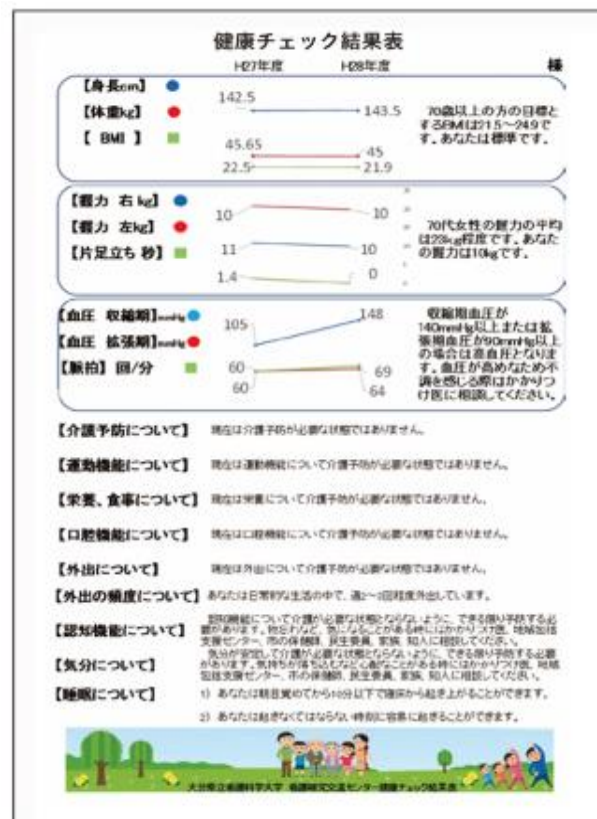
- ・独居の高齢者の認知機能の変化を学生・担当教員が気づいたことをきっかけに、事業推進委員（大分市保健師）と情報共有し、個別訪問実施後、経過観察となった。
- ・事業報告会（地域交流会）での健康チェックの結果から、特定の地区で他地区に比べ体力測定結果が低いとされたことから、保健師や健康推進委員による運動教室がサロン活動に追加導入された。

【平成 29 年度】

- ・独居の高齢者の経年的な体重減少に学生・担当教員が気づいたことをきっかけに、事業推進委員（地域包括支援センター、大分市保健師）と情報共有し、個別訪問実施後、見守り活動が継続となった。

(4) 健康チェック結果のフィードバック

前記の対照群の際に健康チェックを受けた人には、結果の個人票を大学が独自に作成し、複数年協力した場合には経年変化が分かるグラフを添え、個別に郵送した（図20）。



健康チェック結果表

図20 健康チェック個人票

5. 4. 外部評価

1) 外部専門家の招聘

本事業では既に述べたように、さまざまな機会に中間評価を行ってPDCAサイクルを展開することに努めたが、同じ目的で当初から計画していたことの一つに、コロラド大学名誉教授 Dr. Magilvy (コミュニティ看護学) による事業コンサルティングがある。初年度から定期的に同教授を招聘し、事業の進捗状況を紹介してコンサルティングを受け、事業にフィードバックした(表22、図21)。

表22 Dr. Magilvy によるコンサルティング

| 年度 | 日程 | コンサルティング概要 |
|----|---------------|--|
| 25 | 10月16日 | ○地区踏査への同行：事業対象地区への地区踏査へ同行し、地域課題の抽出、実習運営に関する助言を得た。 |
| 26 | 11月14日 | ○コンサルティング会議：テスト実習及び、試行的実習の経過を踏まえ、今後の実習運営に関する助言を得た。 |
| 27 | 9月7～9日 | ○事業進捗報告会：本格的実施1年目の問題と課題に関して、その対策等の助言を得た。 ○コンサルティング会議：実習運営、研究的取り組みに関する助言を得た。 ○訪問同行：富士見が丘団地の協力者宅を訪問する担当学生に同行し、訪問実習の方法についての助言を得た。 |
| 28 | 11月16～17日、22日 | ○訪問同行：富士見が丘団地、野津原地区の協力者宅に、担当学生と同行し、訪問実習の方法についての助言を得た。 ○事業進捗報告会：本格的実施2年目の問題と課題に関して、その対策等の助言を得た。 ○地域関係者との交流会：事業推進会議委員と「地域同士の繋がり」、地域と大学の連携などをテーマに意見交換が行われた。 |

○コンサルテーション会議：同行訪問、学生・地域関係者との交流会の振り返り、事業の進め方について助言を得た。

29

8月8日

○コンサルテーション会議：事業の経過と評価について説明し、事業の概要及び、学生の学びについて整理した英語論文2編について報告し助言を得た。



図2 1 学生に同行して訪問する Dr. Magilvy

2) 日本学術振興会による評価

「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業」として採択されている全国の大学は、日本学術振興会による中間評価を受けた(図2.2)。これは、地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)の着実かつ効果的な実施に資するために、各事業の進捗状況や成果及び事業の継続・発展性を見通しなどを評価する目的で実施されたものである。その結果、本事業はS評価を受けた。S評価を受けたのは、全国76大学中の7校(全体の9.2%)のみであった。

平成28年度評価 評価結果

| | | | |
|-------|--------------------------------|------|----|
| 選定年度 | 平成25年度 | 整理番号 | 31 |
| 大学等名称 | 大分県立看護科学大学 | | |
| 事業名称 | 看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業 | | |

(「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業委員会」による評価)

| |
|--|
| <p>(総合評価)</p> <p>S:計画を超えた取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を十分に達成することが期待できる。</p> |
| <p>【コメント】</p> <p>【優れている点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看護系大学の利点、優れた点を最大限に生かして、他地域の手本となる取組を展開しており、更にそれを確実にモデル化して還元する姿勢を持っていることは高く評価できる。 ・開発、試行、実施、改善という一連の流れの中でカリキュラムを確立していることが明瞭であり、その目標設定やデザインも適切である。また、地域、ステークホルダー、学生、教員等の連携も明確であり、それぞれに効果をもたらされている点は優れた設計に基づく事業展開と言え高く評価できる。 |

図2.2 日本学術振興会による中間評価結果

6. 対外発信

6. 1. シンポジウム

1) COC/COC+シンポジウム

村嶋幸代：看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業，「おおいた創生」事業キックオフシンポジウム，大分，レンブラントホテル，2016. 2. 8（パネリスト）

影山隆之：看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業，九州・沖縄 COC/COC+合同シンポジウム IN 鹿児島 2016，鹿児島，鹿児島大学稲盛会館，2016. 10. 29（講演）

影山隆之：COC+事業が目指すもの，そして，それを越えるもの，九州・沖縄 COC/COC+合同シンポジウム in おおいた 2017，大分，大分大学駄原キャンパス，2018. 10. 28（講演）

2) 日本文理大学との合同シンポジウム

(1) 平成 27 年度

平成 28 年 2 月 11 日 ホルトホール大分

参加者：365 人（一般 173 人、協力者 11 人、協力者の家族 3 人、
講師・来賓 7 人、大分県立看護科学大学教職員・学生 26 人、
日本文理大学教職員・学生 102 人、高校生 43 人）

発表学生：荻本明日香（3 年） 宮本季歩（1 年） 岩本美穂（3 年） 倉光真由（1 年）

コーディネーター：亜細亜大学 学長 栗田 充治

パネリスト：岩波内科クリニック 岩波栄逸

大分市市民部野津原支所 渡邊信司

大分合同新聞 松尾和行

日本文理大学 吉村充功

大分県立看護科学大学 影山隆之

来賓：野津原地区自治委員連絡協議会 会長 佐藤克治

富士見が丘連合自治会 会長 佐々倉幸義

プログラム：

主催者代表挨拶

平居孝之（日本文理大学 学長）

各大学取り組み説明

①豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成

吉村充功（日本文理大学 学長室長）

②看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業

佐藤玉枝（大分県立看護科学大学 看護学部 特任教授）

学生取り組み成果発表

(1)高齢者の健康維持・増進に向けた予防的看護の関わりについて

～野津原地区の取り組み～

(2)一人暮らしの高齢者が生きがいをもって若々しく過ごすために

～富士見が丘団地の取り組み～

パネルディスカッション

「大分の未来をまもり、作る人材育成の可能性」

閉会挨拶 村嶋幸代（大分県立看護科学大学 学長）

参加者の感想（抜粋）

- ・両大学の地域貢献活動、事業の取り組みが理解できた。このような取り組みが真の街づくり、地域創生の基礎となると思う。今後も継続して実施してもらいたい。
- ・国および各産業界をあげて地域創生と言われているが、かけ声だけで具体性がないように感じていた。しかし今回の発表を聞いて、若者が地域を考える事は非常に意義深いと思った。地域は国が創るのではなく、人が創るものと感じた。学生たちが地域とのコミュニケーションを通じて、地域を愛する人材になる事を期待したい。
- ・看護が地域と連携していくことの必要性を感じているもののどんな形でそれが可能になるのかなかなか形に見えなかったが、今回のシンポジウムや発表がヒントになった。
- ・学生は”生き方”を学んでいると思った。
- ・地域の方の信頼も厚くコミュニケーションが良くとれていることが分かった。学生さん、地域の方がいきいきとしていてうらやましく感じた。
- ・地域をキャンパスにして世代をこえて、お互いに成長しあっている地域活動がすごいですね。この時代を生き抜く力を学び、幸せ感を共有できるところが感動的だった。
- ・家庭訪問実習は非常によい取り組みだと思う。できれば、看護だけでなく、高齢者に かわる様々な問題（防犯、防災、交通事故）等もからめて、他の大学でも同じような取り組みを行ってほしい。学生のコミュニケーション能力向上と高齢者の安全・安心の確保を図り、より良い地域づくりを進めてもらいたい。
- ・少子高齢化の進む中で、医療という視点で地域と関わり、学生たちも成長していく、とてもいい取り組みだと思う。

(2)平成 28 年度

平成 29 年 2 月 18 日 ホルトホール大分

参加者 244 人（一般：94 人、協力者：9 人、協力者の家族：1 人、卒業生：1 人、

講師：4人、大分県立看護科学大学教職員・学生20人、
日本文理大学教職員・学生：115人)

発表学生：2チーム

協力者コメント発表：2人

卒業生コメント発表：1人

プログラム：

開会の辞 平居孝之（日本文理大学学長）

基調講演 大森 昭生（共愛学園前橋国際大学 学長）

「地学一体で取り組む人材育成の成果と課題」

大学COC事業の各大学取り組み・発表

①大分県立看護科学大学の取り組み

・「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業」
杉本 圭以子（大分県立看護科学大学 講師）

・学生成果発表（図23）

「看護学生の“ささやかな”気づきを地域のために～
ご夫婦が望む生活のための支援～」

「協力者さんから学んだ地域とのつながり」

・卒業生コメント 小畑春香

・協力者コメント 櫻井宗之、御手洗博子

②日本文理大学の取り組み

・「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」
市田 秀樹（日本文理大学工学部COC担当 特任准教授）

・学生成果発表

「Kids Smile Project ～佐賀県自然体験活動支援～」

「域学協働での地域づくり」

パネルディスカッション

コーディネーター：佐賀大学 全学教育機構 教授 五十嵐 勉

パネリスト：大分県企画振興部政策企画課 磯田健

大分信用金庫事業先サポート室 三重野幸一

日本文理大学経営経済学部 鍋田 耕作

大分県立看護科学大学看護 影山 隆之

コメントーター：共愛学園前橋国際大学学長 大森 昭生

参加者の感想（抜粋）

・若者、COCの発展の可能性を非常に感じた。

・学生の体験学習の上にたった発表だったので、迫力があり非常に感動的で心に残り、為になった。4時間

は長いと思って来たが、長く感じなかった。

- ・これまで COC の取り組み自体を知らなかったが、色々な地域でこのような成果がでていることがすばらしいと感じた。今後も継続した取り組みを期待している。
- ・地域に大変協力的な大学があることはとても心強い。学生の素直な、真面目な取り組みに、力強く感謝している。
- ・地域の方々からの声に感動した。地域での活動には様々な苦労があるかと思うが、素晴らしい活動なので、ぜひ続けて欲しい。
- ・期待以上の内容だった。
- ・学生が経験した失敗について報告があれば、もっと面白かったのではないかと思う。
- ・大分県立看護科学大学の COC の事業の立ち上げの時に関わらせていただいたが、学生の目覚ましい成長を頼もしく思った。良い体験をした学生達が社会や地域で活躍してくれる事を期待する。
- ・学生の訪問は老人にとって大きな楽しみの一つである。
- ・学生だけでなく協力者さんからも意見を聞くことができ、貴重な機会だった。効果は良く伝わったが、デメリット・課題についてももっと提示したらよいと思った。
- ・知事、市長、企業関係者にも参加して頂ければ、さらに充実すると思う。



図 2 3 学生の発表と卒業生・協力者のコメント

6. 2. 学会発表等

1) ポスター発表

Iwasaki R, Sato T, Magilvy K, Kageyama T, Murashima S: Development of a project supporting aging in rural Japanese communities. 49TH Western Institute of Nursing, Disneyland Hotel, Anaheim, USA. 2016.4.9

村嶋幸代, 福田広美, 岩崎りほ, 平井和明, 野津昭文, 影山隆之, 看護学生による予防的家庭訪問実習(第1報)全学的取り組みの経過, 第75回日本公衆衛生学会, 大阪府, グランフロント大阪, 2016.10.27

野津昭文, 岩崎りほ, 平井和明, 川崎涼子, 福田広美, 影山隆之, 村嶋幸代, 看護学生による予防的家庭訪問実習(第2報)~効果測定の基本スライディングデータ~. 第75回日本公衆衛生学会, 大阪府, グランフロント大阪, 2016.10.27

岩崎りほ, 平井和明, 甲斐博美, 野津昭文, 影山隆之, 村嶋幸代, 看護学生による予防的家庭訪問実習(第3報)学生の学びの様相, 第75回日本公衆衛生学会, 大阪府, グランフロント大阪, 2016.10.27

平井和明, 岩崎りほ, 野津昭文, 影山隆之, 村嶋幸代, 看護学生による予防的家庭訪問実習(第4報)学生間の知的体験の様相, 第75回日本公衆衛生学会, 大阪府, グランフロント大阪, 2016.10.28

平井和明, 岩崎りほ, 巻野希和, 影山隆之, 村嶋幸代, 看護学生による予防的家庭訪問実習(第5報):高齢者の生活機能と健康への関心の変化, 第76回日本公衆衛生学会, 鹿児島, かがしま県民交流センター, 2018.11.2

2) 講演等

Fukuda H, Okamoto A, Sato T, Kageyama T, Baba N, Shirley G, and McGilvy K, Murashima S: Preventive interventions of nursing students to the elderly of the community through a continuous preventive home visit practicum: A qualitative research analysis. 6th International Conference on Community Health Nursing Research, Seoul National University, Seoul, South Korea. 2015.8.20

村嶋幸代:“地域志向のケア”教育強化に向けた取り組み. 第35回日本看護科

学学会学術集会, シンポジウムⅡ 地域包括ケア時代における看護学教育の新たな取り組み. 広島, 2015. 12. 6

影山隆之, 全学生と全教員が参加する定期的な家庭訪問実習, 第44回九州地区学生指導研究集会, 大分県, 大分オアシスタワーホテル, 2016. 9. 1

村嶋幸代, 第1回 公立大学学長会議「地域づくりと公立大学の教育」, 北九州市立大学, 2016. 10. 10

岩崎りほ, 地域を志向した予防的家庭訪問実習の取り組みとその効果, 日本地域看護学会第20回学術集会, 大分, 別府市ビーコンプラザ, 2017. 8. 6

影山隆之, 岩崎りほ, 地域包括ケア時代に地域を志向した新しい看護学実習, 日本地域看護学会第20回学術集会, 大分, 別府市ビーコンプラザ, 2017. 8. 6

3) 展示

第18回若葉祭, 大分県立看護科学大学, 2016. 5. 16-17

大分県立看護科学大学オープンキャンパス “予防的家庭訪問実習って何だろう?”, 2016. 7. 19

第75回日本公衆衛生学会, 大阪府, グランフロント大阪, 2016. 10. 26-28

6. 3. 誌上発表

岩崎りほ, 平井和明, 板井里枝, 影山隆之, 村嶋幸代, 高齢者の健康と生活から学生が学ぶ予防的家庭訪問実習, 看護展望, 41(10), 42-46, 2016

6. 4. 報道

1) 記者会見

大分県立看護科学大学・日本文理大学 共同記者会見
平成 27 年 4 月 28 日 JR おおいたシティ

内容説明：吉村充功（日本文理大学学長室）

・大分県立看護科学大学（平成 25 年度採択）

「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業」

・日本文理大学（平成 26 年度採択）

「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」

学長対談

コーディネーター：日本政策投資銀行大分事務所所長 武田浩

大分県立看護科学大学 村嶋幸代

日本文理大学学長 平居孝之

2) 新聞等

平成 25 年度

| 日付 | 記事タイトル | 新聞社 |
|-------------------|----------------------------|-----------|
| 平成 25 年 11 月 1 日 | 看護科学大 地域の高齢者方訪問 相談、体調をチェック | 大分合同新聞 夕刊 |
| 平成 25 年 11 月 25 日 | 県立看護大生 高齢者の生活調査 交通事情や健康状態 | 大分合同新聞 夕刊 |

平成 26 年度

| 日付 | 記事タイトル | 新聞社 |
|-------------------|---|-----------|
| 平成 26 年 11 月 20 日 | 看護科学大、来年度から本格化 高齢者宅訪ね健康チェック 介護予防へアドバイス 地域協力深める | 大分合同新聞 夕刊 |
| 平成 27 年 1 月 31 日 | 高齢者宅訪問で学んだこと発表 看護科学大が交流会 | 大分合同新聞 朝刊 |

平成 27 年度

| 日付 | 記事タイトル | 新聞社・ネット |
|------------------|------------------------|-------------|
| 平成 27 年 4 月 15 日 | 県立看護大：高齢者宅訪ね実習 全学年の必修に | 毎日新聞ネットニュース |

| | | |
|------------------|--|--------------------------------|
| 平成 27 年 4 月 22 日 | より実践的な講座へ。大分県立看護科学大学が高齢者宅の訪問を必修化 | みんなの介護ニュース |
| 平成 27 年 4 月 29 日 | 看護科学大と文理大 地域連携の成果を報告 | 大分合同新聞 朝刊 |
| 平成 27 年 4 月 30 日 | 大分・「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」採択 2 大学が事業内容報告 | Yahoo!ニュース （みんなの経済新聞ネットワーク） |
| 平成 27 年 5 月 8 日 | 県立看護大と日本文理大 地方創生へ学生育成 文科省「地（知）の拠点整備事業」に採択 | 毎日新聞 朝刊 |
| 平成 27 年 9 月 12 日 | 県立看護科学大が「予防的家庭訪問実習」高齢者の自立促す | 大分合同新聞 朝刊 |
| 平成 27 年 9 月 22 日 | アメリカの専門家からも高評価！ 大分県立看護科学大学の高齢者宅訪問実習が話題に | みんなの介護ニュース |
| 平成 28 年 2 月 12 日 | 少子高齢化など研究成果を発表 文理大と看護科学大 | 大分合同新聞 朝刊 |

平成 28 年度

| 日付 | 記事タイトル | 新聞社・広報紙 |
|------------------|-----------------------------|------------------------------------|
| 平成 28 年 12 月 1 日 | ハエ釣りで心豊かな交流 | 大分合同新聞 夕刊 |
| 平成 28 年 12 月 8 日 | 「ハエ釣りで心豊かな交流」記事の訂正箇所 の掲載 | 大分合同新聞 夕刊 |
| 平成 29 年早春 | 交流に教えられて | 老人クラブ広報紙 すこやか老友おおい いた 第 28 号 |

平成 29 年度

| 日付 | 記事タイトル | 新聞社・情報誌・ネット |
|------------------|--|---------------------------|
| 平成 29 年 11 月 6 日 | 看護学部生が高齢者を訪問しながら学ぶ | 日経グローバル No. 327 20 ページ |
| 平成 30 年早春 | 平成 29 年度特徴的な事例紹介『看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業』 | COC ポータルサイト |

3) テレビ・ラジオ

平成 28 年度

| 日付 | 内容 | 放送局 |
|---------------------|-----------------|-------------|
| 平成 28 年 6 月 15 日 | TV 番組「ほっとはーと大分」 | TOS (テレビ大分) |
| 平成 28 年 9 月 17 日 | ラジオ番組「たんねるけん！」 | OBS (大分放送) |

7. 予算執行

| 年度 | 予算(円) | 決算(円) |
|----------|------------|------------------|
| 平成 25 年度 | 4,359,000 | 1,394,565 |
| 平成 26 年度 | 17,140,000 | 15,093,171 |
| 平成 27 年度 | 12,206,000 | 12,206,000 |
| 平成 28 年度 | 12,762,000 | 10,934,703 |
| 平成 29 年度 | 12,233,000 | 12,233,000 (見込み) |

8. まとめと展望

以上のように、本学のCOC事業として構想した“看護学生による予防的家庭訪問実習を通したまちづくり”は、一部で当初の計画を変更しなければならなかったものの、全体としては概ね構想に沿って実現された。

事業の前半では2年度をかけて、学内体制の構築、事業展開地域のステークホルダーと協働する場の構築、および学部カリキュラムの改定作業を行い、一部学生による試行的訪問を重ねて訪問実習の方法を検討することができた。ことに、地域の諸団体・機関と共に協議する機会を慎重に構築したことが、住民の理解を得て事業を円滑に進めることに役立った。後半の3年間では、学部生と教員の全員が参加する形で、実習の本格実施に入ることができた。必要な数の在宅高齢者から本実習への協力を得て、全学生がほぼ当初の予定通りに協力者の自宅を訪問し、実習を開始することができた。ただし、平成27年度の事業報告会には全学生が参加したが、そのあり方について見直しが必要であったため、平成28～29年度の地域交流会では一部の学生のみでの参加にとどまった。

学生の学修状況を分析した範囲では、学生が地域に目を向けるようになり、高齢者を一生活者としてとらえたり、生活環境や地域社会にも目を向けたりできるようになっており、構想した通りの成果が得られつつある。また、学年を超えたチーム編成により、リーダーシップの涵養やチームワークの向上などの、プラスの効果も見られた。

多くの協力者が学生の訪問を楽しみにしており、生活に張りが出たことを報告していた。訪問が協力者の生活機能の維持に役立ったというエビデンスは、足かけ3年間の実績からは確認できなかった。しかし、学生の訪問により健康への関心が高まったことは確認された。在宅高齢者による協力が続けて得られるかどうかは本事業開始前に未知であったが、協力者の条件を75才以上とした場合には、毎年2割程度の辞退者が見込まれることが判明した。

地域で高齢者が自立した生活を維持するための課題が浮かび上がる中で、個別の事例における問題は、然るべき機関と連携することにより対応できた。地域全体の課題については、大学が行政や健康推進委員と共有して共に考える事案が見られ、今後の参考になった。本事業で住民から協力が得られたこと、社会への発信の機会を多数もてたことは、地域における大学のプレゼンスを示す機会ともなった。

COC事業終了後も本実習を学部生の必修科目として継続するため、平成30年度以降は看護研究交流センターやプロジェクト会議のあり方を一部再編し、学外との連携体制の一部を簡略化して、持続可能な教育プログラムとする予定である。

資料

大分県立看護科学大学地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）推進会議設置要綱

（目的）

第1条 地（知）の拠点整備事業を大分県立看護科学大学（以下、「大学」という。）と地域、関係機関が連携して効果的に推進し、地域住民の健康寿命の延伸と生活の質の向上を図ることによって、地域のまちづくりに寄与するとともに、大学として新たな取り組みによる質の高い看護教育効果を達成できるよう事業計画や進行管理、評価等を行うため事業推進会議（以下、「会議」という。）を設ける。

（任務）

第2条 会議は、次に掲げる事項について検討協議する。

- （1）事業推進計画に関すること。
- （2）事業の中間評価、事業評価に関すること。
- （3）その他事業の推進に関すること。

（組織）

第3条 会議は、委員30人以内で組織する。

- 2 委員の任期は1年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
- 3 会議に委員長および副委員長を置く。
- 4 委員長および副委員長は、委員の互選により選出する。

（職務）

第4条 委員長は、会議を招集し、その議長となる。

- 2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときはその職務を代理する。

（代理）

第5条 委員である者が会議に出席できない場合には、その会議当日のみ代理の者を委嘱された委員の代わり委員と認めるものとする。

（幹事会）

第6条 会議に、事業の推進に関する調査研究を行うため、幹事会を置く。

（庶務）

第7条 会議の庶務は、大分県立看護科学大学が行う。

(雑則)

第8条 この要綱に定めるもののほか、会議の運営に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

附則 この要綱は、平成25年10月1日から施行する。

地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）事業推進会議メンバー

※委員の所属・役職表記は就任期間当時のもの

| 区分 | 氏名 | 所属・組織等 | 役職 | 年 度 | | | | |
|-----------|-------|-------------------------------------|------------|-----|----|----|----|----|
| | | | | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |
| 野津原 地区 | 佐藤克治 | 野津原地区自治委員 連絡協議会 | 会長 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 分藤靖弘 | 野津原地区 社会福祉 協議会 | 会長 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 工藤富士隆 | 野津原地区民生委員 児童委員協議会 | 会長 | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | 裸野将紀 | 野津原地区民生委員 児童委員協議会 | 会長 | | | | ○ | ○ |
| | 川本浩史 | 野津原地区 地域包括支援センター | センター長 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 天野秀幸 | 大分市市民部 野津原支所 | 支所長 | ○ | ○ | | | |
| | 渡邊信司 | 大分市市民部 野津原支所 | 支所長 | | | ○ | ○ | |
| | 斉藤慎悟 | 大分市市民部 野津原支所 | 支所長 | | | | | ○ |
| | 木崎美穂 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター 野津原健康支援室 | 参事補兼室 長 | ○ | | | | |
| | 有賀美枝子 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター 野津原健康支援室 | 参事補兼室 長 | | ○ | ○ | ○ | |
| | 小野明美 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター 野津原健康支援室 | 参事補兼室 長 | | | | | ○ |

| | | | | | | | | |
|---------|-------|-----------------------------|-----------------|---|---|---|---|---|
| 富士見が丘団地 | 佐々倉幸義 | 富士見が丘連合自治会 | 会長 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 品川晴美 | 富士見が丘連合自治会 | 会長 | | | | ○ | ○ |
| | 高田かず子 | 横瀬地区社会福祉協議会、横瀬地区民生委員児童委員協議会 | 事務局長 富士見が丘担当 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 野口咲美 | 植田西地域包括支援センター | センター長 | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | 吉良早苗 | 植田西地域包括支援センター | センター長 | | | | ○ | ○ |
| | 仲野龍男 | 大分市市民部植田支所 | 参事兼支所長 | ○ | | | | |
| | 伊藤真由美 | 大分市市民部植田支所 | 参事兼支所長 | | ○ | ○ | | |
| | 藤田庄司 | 大分市市民部植田支所 | 支所長 | | | | ○ | |
| | 淵 万壽 | 大分市市民部植田支所 | 市民部審議監 兼支所長 | | | | | ○ |
| | 岩本美保子 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター | 参事補 | ○ | | | | |
| | 木崎美穂 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター | 参事補 | | ○ | ○ | | |
| | 羽田多佳子 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター | 参事補 | | | | ○ | ○ |
| | 竹上浩二 | 富士見が丘連合自治会 | 福祉部長 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 生野信頼 | 富士見が丘公民館 | 事務長 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 小田原純平 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター | 専門員 | ○ | ○ | ○ | ○ | |

| | | | | | | | | |
|------------|-------|-------------------------|-----------------------------|---|---|---|---|---|
| | 赤峰優子 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター | 職員 | | | | | ○ |
| 医師会 | 岩波栄逸 | 大分郡市医師会 | 副会長・理事(岩波内科 クリニック 院長) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 看護協会 | 甲斐久美子 | 大分県看護協会 | 副会長 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 大分県 国保連 | 大塚英治 | 大分県国民健康保険 団体連合会事業課 | 課長 | ○ | | | | |
| | 野尻徹朗 | 大分県国民健康保険 団体連合会事業課 | 課長 | | ○ | | | |
| | 薬師寺章光 | 大分県国民健康保険 団体連合会事業課 | 課長 | | | ○ | | |
| | 浅野康之 | 大分県国民健康保険 団体連合会事業課 | 課長 | | | | ○ | ○ |
| | 大島敦子 | 大分県国民健康保険 団体連合会事業課 | 課長補佐 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 大分市 | 十時昌彦 | 大分市役所福祉保健部 長寿福祉課 | 課長 | ○ | ○ | | | |
| | 後藤 剛 | 大分市役所福祉保健部 長寿福祉課 | 次長兼課長 | | | ○ | ○ | ○ |
| | 生野裕子 | 大分市役所福祉保健部 長寿福祉課 | 参事補 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 菊田和子 | 大分市役所福祉保健部 長寿福祉課 | 参事 | | | | ○ | ○ |
| | 後藤英子 | 大分市保健所健康課 | 次長兼課長 | ○ | | | | |
| | 軸丸千賀子 | 大分市保健所健康課 | 次長兼課長 兼中央保健 | | ○ | ○ | | |

| | | | | | | | | |
|------------------------|-------|-------------------------|----------------------|---|---|---|---|---|
| | | | センター所 長 | | | | | |
| | 竹野美和子 | 大分市保健所健康課 | 課長 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 中宗三和子 | 大分市保健所健康課 | 参事 | | | | ○ | ○ |
| 大分県 | 内田弘子 | 大分県福祉保健部 福祉保健企画課 | 主幹 | ○ | | | | |
| | 小林由美 | 大分県福祉保健部 福祉保健企画課 | 主幹 | | ○ | ○ | ○ | |
| | 飯田育子 | 大分県福祉保健部 福祉保健企画課 | 主幹 | | | | | ○ |
| | 甲斐優子 | 大分県福祉保健部 医療政策課 | 課長補佐(総 括) | ○ | | | | |
| | 加来理香 | 大分県福祉保健部 医療政策課 | 課長補佐(総 括) | | ○ | ○ | ○ | |
| | 池田裕美 | 大分県福祉保健部医療 政策課 | 課長補佐(総 括) | | | | | ○ |
| | 柳井孝則 | 大分県福祉保健部 高齢者福祉課 | 主幹(総括) | ○ | | | | |
| | 麻生竜二 | 大分県福祉保健部 高齢者福祉課 | 主幹(総括) | | ○ | ○ | | |
| | 渡邊康弘 | 大分県福祉保健部 高齢者福祉課 | 主幹(総括) | | | | ○ | ○ |
| 大分県 立看護 科学大 学 | 村嶋幸代 | | 学長・理事 長 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 甲斐倫明 | 看護研究交流センター /環境保健学研究室 | センター長 研究科長/教 授 | ○ | ○ | ○ | | |

| | | | | | | | | |
|--|-------|-------------------------|------------------|---|---|---|---|---|
| | 影山隆之 | 看護研究交流センター /精神看護学研究室 | センター長 研究科長/教授 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 市瀬孝道 | 生体反応学研究室 | 学部長/教授 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 藤内美保 | 看護アセスメント学研 究室 | 学部長/教授 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 佐藤玉枝 | 地域看護学研究室 | 特任教授 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 稲垣 敦 | 健康運動学研究室 | 教授 | ○ | | | ○ | ○ |
| | 小野美喜 | 成人・老年看護学研 究室 | 教授 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 福田広美 | 保健管理学研究室 | 教授 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 宮内信治 | 言語学研究室 | 准教授 | ○ | | | ○ | ○ |
| | 川崎涼子 | 地域看護学研究室 | 准教授 | | | | ○ | ○ |
| | 杉本圭以子 | 精神看護学研究室 | 講師 | | | | ○ | ○ |
| | 定金香里 | 生体反応学研究室 | 学内講師 | | | | ○ | ○ |
| | 河野梢子 | 看護アセスメント学研 究室 | 助教 | ○ | | | | |
| | 巻野雄介 | 基礎看護学研究室 | 助教 | | | | ○ | ○ |
| | 山田貴子 | 看護アセスメント学研 究室 | 助教 | | | | ○ | ○ |
| | 佐藤弥生 | 保健管理学研究室 | 助教 | | | | | ○ |
| | 野津昭文 | 健康情報科学研究室 | 助教 | | | | | ○ |
| | 安部昭邦 | | 事務局長 | ○ | | | | |
| | 堤 健一 | | 事務局長 | | ○ | ○ | | |
| | 飯田隆次 | | 事務局長 | | | | ○ | ○ |

| | | | | | | | | |
|--|-------|------------|---------------|---|---|---|---|---|
| | 朝倉泰三 | 総務グループ | リーダー(課長補佐) | ○ | ○ | | | |
| | 橋本満男 | 総務グループ | リーダー(課長補佐) | | | ○ | | |
| | 石倉 順 | 総務グループ | リーダー(課長補佐) | | | | ○ | |
| | 高橋勝三 | 総務グループ | リーダー(課長補佐) | | | | | ○ |
| | 岩崎瑞穂 | 総務グループ | サブリーダー(主幹) | | | ○ | | |
| | 中野麻梨子 | 総務グループ | 主任 | | | ○ | | |
| | 江田真砂実 | 教務学生グループ | 副主幹 | | | ○ | | |
| | 矢野昌哉 | 教務学生グループ | 副主幹 | | | | ○ | |
| | 岩崎りほ | 看護研究交流センター | 助教 | | | ○ | ○ | ○ |
| | 松本初美 | 看護研究交流センター | 特任講師 | | | ○ | | |
| | 平井和明 | 看護研究交流センター | 特任助教 | | | | ○ | ○ |
| | 今池純子 | 看護研究交流センター | 臨時助手 | | ○ | ○ | ○ | |
| | 板井里枝 | 看護研究交流センター | 臨時助手 | | ○ | ○ | ○ | |
| | 巻野希和 | 看護研究交流センター | ティーチング・アシスタント | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 時松栄里 | 看護研究交流センター | ティーチング・アシスタント | | ○ | | | |
| | 江口由紀子 | 看護研究交流センター | ティーチング・アシスタント | | | ○ | | |

| | | | | | | | | |
|--|------|------------|-----|--|---|---|---|---|
| | 神崎純子 | 看護研究交流センター | 事務員 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 岩田祐未 | 看護研究交流センター | 事務員 | | | ○ | | |
| | 生野法子 | 看護研究交流センター | 事務員 | | | | ○ | ○ |

大分県立看護科学大学地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）推進会議幹事会運営要領

1 目的

幹事会は、大分県立看護科学大学地（知）の拠点整備事業推進会議設置要綱に基づき、地（知）の拠点整備事業（以下、「事業」という。）の効果的な推進について研究することを目的とする。

2 任務

幹事会は、次に掲げる事項について研究を行う。

- （1）事業の計画に関すること。
- （2）事業の評価、見直しに関すること。
- （3）その他事業の推進に関すること。

3 組織

- （1）幹事会は、幹事若干人で組織する。
- （2）幹事会は、必要があると認められるときは、関係者に出席を求めて意見を聴くことができる。

4 庶務

幹事会の庶務は、大分県立看護科学大学で行う。

5 その他

この要領に定めるもののほか、幹事会の運営に必要な事項は別に定める。

附則

この要領は、平成25年10月1日から適用する。

地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）幹事会メンバー

※委員の所属・役職表記は就任期間当時のもの

| 区分 | 氏名 | 所属・組織等 | 役職 | 年 度 | | | | |
|---------|-------|-------------------------------------|------------|-----|----|----|----|----|
| | | | | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |
| 野津原地区 | 川本浩史 | 野津原地区 地域包括支援センター | センター長 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 木崎美穂 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター 野津原健康支援室 | 参事補 兼室長 | ○ | | | | |
| | 有賀美枝子 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター 野津原健康支援室 | 参事補 兼室長 | | ○ | ○ | ○ | |
| | 小野明美 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター 野津原健康支援室 | 参事補 兼室長 | | | | | ○ |
| 富士見が丘団地 | 野口咲美 | 植田西 地域包括支援センター | センター長 | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | 吉良早苗 | 植田西 地域包括支援センター | センター長 | | | | ○ | ○ |
| | 岩本美保子 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター | 参事補 | ○ | | | | |
| | 木崎美穂 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター | 参事補 | | ○ | ○ | | |
| | 羽田多佳子 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター | 参事補 | | | | ○ | ○ |
| | 小田原純平 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター | 専門員 | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| | 赤峰優子 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター | 嘱託職員 | | | | | ○ |
| | | | | | | | | |

| | | | | | | | | |
|--------------------|------|-------------------------|--------------------------|---|---|---|---|---|
| | 生野裕子 | 大分市役所福祉保健部 長寿福祉課 | 参事補 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 菊田和子 | 大分市役所福祉保健部 長寿福祉課 | 参事 | | | | ○ | ○ |
| 大分県立 看護科学 大学 | 村嶋幸代 | | 学長・ 理事長 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 影山隆之 | 看護研究交流センター/ 精神看護学研究室 | センタ ー長 研究科 長/教授 | | | ○ | ○ | ○ |
| | 堤 健一 | | 事務局 長 | | | ○ | | |
| | 飯田隆次 | | 事務局 長 | | | | ○ | ○ |
| | 佐藤玉枝 | 地域看護学研究室 | 特任教 授 | ○ | ○ | ○ | | |
| | 福田広美 | 看護研究交流センター | 准教授 | ○ | ○ | | | |
| | 岩崎りほ | 看護研究交流センター | 助教 | | | ○ | ○ | |
| | 平井和明 | 看護研究交流センター | 特任助 教 | | | | | ○ |

地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）地域連絡会議メンバー

| 区分 | 氏人 | 所属・組織等 | 役職 | 年 度 | | | | |
|-------------|-------|----------------------------------|---------------------|-----|----|----|----|----|
| | | | | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |
| 野津原地区 | 佐藤克治 | 野津原地区 自治委員連絡協議会 | 会長 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 天野秀幸 | 大分市市民部 野津原支所 | 支所長 | | ○ | | | |
| | 渡邊信司 | 大分市市民部 野津原支所 | 支所長 | | | ○ | ○ | |
| | 斎藤慎悟 | 大分市市民部 野津原支所 | 支所長 | | | | | ○ |
| | 有賀美枝子 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター | 参事補兼室長 | | ○ | ○ | ○ | |
| | 小野明美 | 大分市保健所健康課 西部保健福祉センター | 参事補 | | | | | ○ |
| 富士見が丘団 地 | 佐々倉幸義 | 富士見が丘連合自治会 | 会長 | | ○ | ○ | | |
| | 品川晴美 | 富士見が丘連合自治会 | 会長 | | | | ○ | ○ |
| | 竹上浩二 | 富士見が丘連合自治会 | 福祉部長 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 高田かず子 | 横瀬地区社会福祉協議会 横瀬地区民生児童委員協 議会 | 事務局長 富士見が丘担 当 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 生野信頼 | 富士見が丘公民館 | 事務長 | | ○ | ○ | ○ | ○ |

○平成 29 年度 看護研究交流センタースタッフ(平成 29 年 4 月 1 日付)

影山 隆之 (看護研究交流センター長・研究科長・精神看護学教授)

岩崎 りほ (看護研究交流センター助教)

平井 和明 (看護研究交流センター特任助教)

巻野 希和 (看護研究交流センターTA)

神崎 純子 (看護研究交流センター事務員)

生野 法子 (看護研究交流センター事務員)

地(知)の拠点整備事業(大学COC (Center of Community)事業)

－看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業－最終報告書

発行日 平成 30 年 3 月 31 日
発行者 大分県立看護科学大学 理事長 村嶋幸代
照会先 大分県立看護科学大学 看護研究交流センター
〒870-1201
大分県大分市大字廻栖野 2944-9
TEL 097-586-4300 (大学代表)
TEL 097-586-4346 (看護研究交流センター直通)
FAX 097-586-4347
E-mail k-center@oita-nhs.ac.jp
<http://www.oita-nhs.ac.jp/np/coc>